

企画・原案・制作 伸童舎 ワースプロジェクト

巨大ロボットファンタジーグラフィックブック2

聖刻大全

聖刻世界編



くアハーンの大地に宿りし聖刻の力、

それは巨人騎士を動かし、奇跡を発動する。

今、聖刻の導きによってその全てを語ろうく

聖

刻



大

ALL ABOUT
VAIRES

全

東方動乱

～^{おとど}鳳の騎士から
母にあてた書簡～

作：千葉 暁

絵：神宮 寺一

教会暦二四三九年 《大動乱》 勃発

教会暦二四三三年六月一三日、東方西部域においてヒゼキアと呼ばれた古より続く小国が隣国の軍勢に攻め込まれ、滅びた。

この時誰が予測しただろう。この辺境の小国の滅亡が、東方全土に吹き荒れる巨大な嵐の前触れであったと……。

《聖刻騎士団東部域方面軍青鳳騎士団所属第三階梯聖騎士 イスルギーン・ツベルクより、東部域ヤーパス国の母親にあてた書簡》

二四三九年九月一二日

東部域バナドス国青鳳騎士団駐屯地にて



「敬愛する母上へ。」

騎士昇格の祝いの品々を受け取りました。心のこもった品をいただき、心よりお礼を申しあげます。ですが、わたくしの昇格は近年西部域で続く動乱に際して緊急に増員をはかる必要があったためで、栄光の称号を賜わるに値する働きを為したわけではありません。

このように記しては、すぐにも我が騎士団の派兵が行われるように受けとめられかねませんね。ご安心ください。増員は万が一、派兵が決定した場合にそなえた処置です。アシヨ一カ法王^{げいか}下^かは、武力の行使を嫌う高潔な御方であり、外交折衝により平和を取り戻す努力を続けておられます。

わたくしが耳にするところ、西部域は酷い状態だそうです。町は操兵の群れに蹂躪^{しゅうりやく}され、罪もない人々が家を潰され、財産、そして命を奪われているとか。話を聞くと、聖騎士であることを忘れて、はらわたが煮えくりかえるような怒りを覚えております。確かに西部域は異教徒が統べる領域でしょう。たとしても同じ人間に違いはありますまい。大地に平和と友愛を広めるのが、我らの神の教えならば、直ちに我が騎士団が出張り、武威をもって鎮圧にあたるべきではないか——かように思えてなりません。(後略)

(なお、この書簡は検閲に引っかかり、騎士団批判に当たるとして書き直しを命じられた)





教会暦二四四〇年 聖刻騎士団派兵

聖刻教会の最高指導者アショーカ・マヘン
ディラ・ハ・ヌ・マール法王は、《大動乱》勃
発当初より西部域の紛争国に対して争いをや
めるように訴えてきた。しかしながら領土拡
大欲にとり憑かれた世俗君主らは法王の声を
無視した。

当時、聖刻教会は世俗君主を従えるだけの
権威を有していなかった。西部域は聖刻教の
教化がもつとも遅れた地域だったという理由
もあるが、アショーカで一三四代を数える歴
代法王は、教会創設以来の聖俗分離の大原則
をかたくなに守り続け、布教国に対する政治
的な干渉を控えていたからだ。

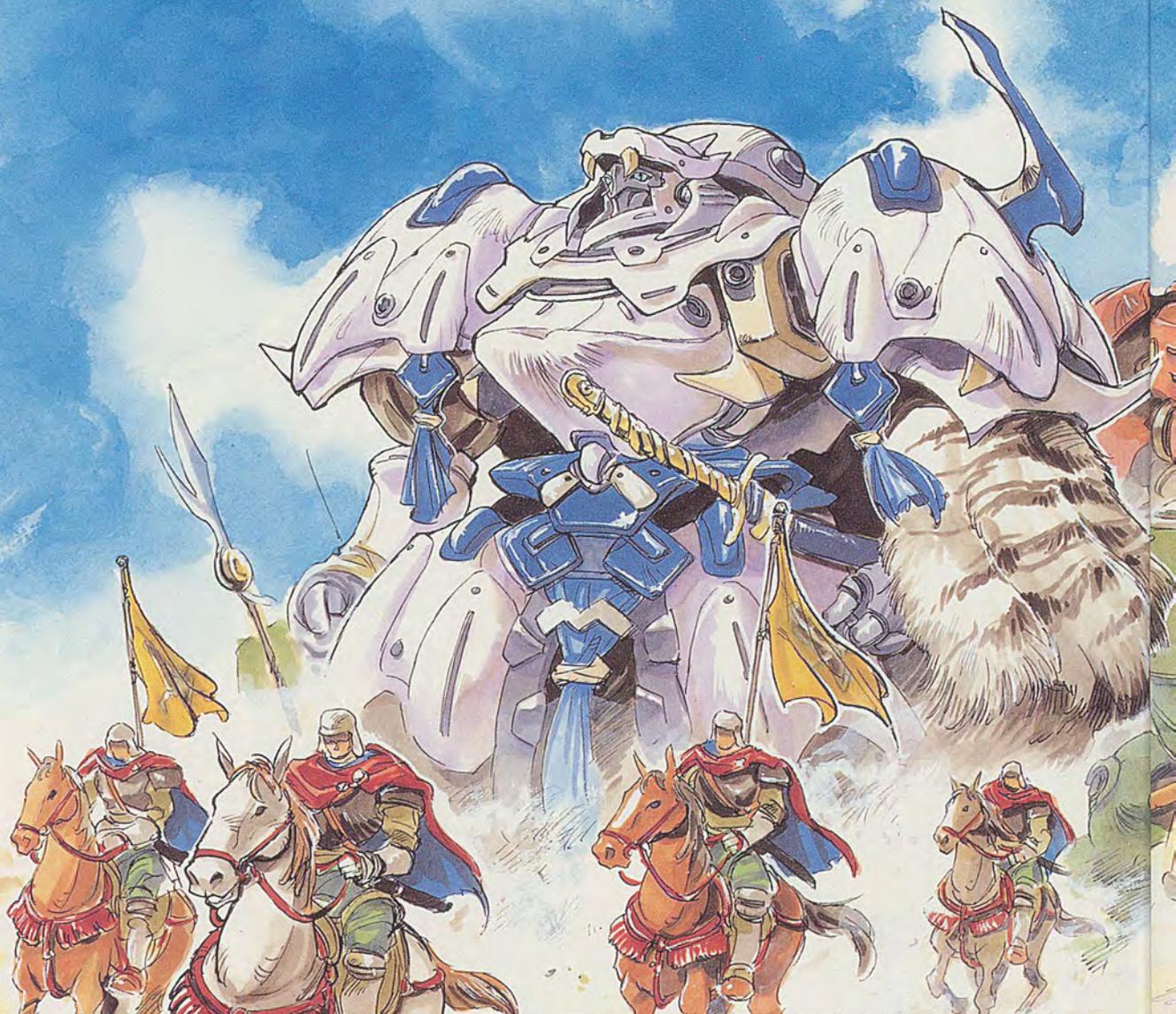
だが、動乱が西部域のみならず南部域や東
部域にまで飛び火し、東方全体に戦火が広が
り、信徒の生命財産が危機に晒され、あまつ
さえ信徒同士が相争う事態となった時、アシ
ョーカ法王はひとつの決断をくだした。

《イスルギーンが母親にあてた書簡の抜粋》

三四四〇年五月六日
東部域バナドス国ヴィシャムにて

「母上、いかがおすごしでしょうか。」

たったひとりの肉親が戦火に追われ、疎開
地で不自由な生活を続けているというのに、
わたくしは何ひとつお助けすることができま
せん。叶うならばすぐにも駆けつけ、お側に



いたいのです。我が青風騎士団はヴィシャム防衛を命じられ、わたくしひとり任地を離れることはできません。どうか親不孝をお許しください。

交易路の起点として栄えたヴィシャムの都は今や見る影もありません。義勇軍、解放軍を自称する不逞な暴徒どもに荒らされ、あの美しかったアルスタイン大聖堂も醜い焼け焦げをつけられました。もちろん仮に燃え落ちたところで、単に目に見える建物が破壊されたに過ぎず、神の権威はいささかも揺るがないものと承知しております。しかし修行浅き身には、怒りを鎮めることが難しゅうございます。

我が母国ヤーバスも同じありさまかと思つて、暗澹たる気持ちに苛まれます。

しかしご安心ください。

ついにアショーカ陛下からの勅命がくだりました。我ら聖刻騎士団による《大動乱》の鎮圧が命じられたのです。

しかも我らを率いる総大将は、騎士団総長ラドウ・ウランド団将閣下です。ご存じでしょうか。閣下は生者で唯ひとりの《機神》の称号をお持ちのかたです。これは三〇〇〇名の聖騎士の中でもっとも高潔で、武勇に優れた人物に与えられる最高の称号なのです。

ウランド閣下は自ら軍勢を率いて教都ワーランを発ち、我が青風騎士団が守るヴィシャムに向かつております。まずは義勇軍、解放軍などと称しバナドス国を荒らし回る不逞な輩どもを掃討した後、我が母国ヤーバスを救うべく全軍を挙げて向かうことでしよう。

教会創設以来の禁令を破り、アシヨーカ法王は聖刻騎士団の派兵を決定した。

聖刻騎士団は、元々教都ワースランを訪れる巡礼者の保護を目的に創設された自衛組織である。正式団員は僧侶の資格を持ちながら、

同時に武勇に優れた修道騎士で、特に《聖騎士》という称号を授けられていた。教会暦一

〇八八年、ワースランが世俗国に侵略されたことを契機に、組織改革がなされて軍事組織としての体裁が整えられたが、自衛を旨とする基本方針に変わりはなく、いわば「戦をし

な軍隊」として一五〇〇年もの長きに亘って存続してきた。

故に世俗騎士の間では聖刻騎士団の力を軽んじる風潮があった。しかしそれも、《大動乱》において彼ら「神の軍団」が戦場に現れるまでのことだった。

《イスルギーンが母親にあてた書簡より抜粋》

三四四〇年九月一三日
東部域田ヤーバス国ニームレにて

母上、手紙をお出しするのが遅れて申しわけありませんでした。無事だと報せるだけに留めておくべきでしょうが、心配症の母上のこと、かえって悪い憶測を巡らせるでしょうから、隠さず事実を記しておきます。



わたくし、先月に行われた戦で負傷し、しばし筆をとれる状態にありませんでした。ご心配には及びません。今ではすっかり快復し、寝台に縛りつけられながらも、こうして手紙を書けるようになりました。来月には軍務に復帰できると医師も申ししております。

母上がお暮らしの町にも『聖刻騎士団、大勝利』の報は届きましたでしょうか。《大動乱》における初の軍団戦は、まさに完勝としかいえません。操兵の数で勝る敵を完膚なきまでに叩いたのです。総大将ラドウ・クランド閣下の采配も見事ならば、我が魂の兄弟の勇猛ぶりも驚嘆に値します。もはや『見かけ倒しの典礼騎士団』などと我らを侮辱する者はいなくなるでしょう。故国での任官を辞し、聖騎士となる道を選び、本当によかったと思っております。

そして、是非とも書き記しておきたいことがあります。戦いが終わった後、我ら負傷者が収容された幕舎に、何とあのクランド閣下が足をお運びくださったのです。

聖騎士三〇〇〇名の頂点に位する団将閣下が、我ら平騎士ばかりでなく、末端の従士にまでひとりひとり労いのお言葉をかけてくださいました。もちろん、わたくしにも。ですが、その時どのような言葉を交わしたか、まるで記憶に残っていないのです。ただただ狼狽しなくなり、同行されたジャン・ストラ軍将やバクル・サーサーン師將に笑われました。ともあれ、閣下は我らが父とも思える素晴らしい御方でした（後略）



教会暦二四四五年 ボランの戦い

聖刻騎士団参戦から五年が過ぎた。

東部域で行われたニームレの戦いを皮切りに騎士団はまさに破竹の進撃を続け、主戦場を東部域から南部域に移していた。

これまで四〇回を越える軍団戦（小規模な戦闘を加えれば二〇〇回以上）にことごとく勝利していたが、さすがにこの時期になると衰えが窺えた。

卓越した技量と類い希なる信仰心に支えられた彼ら「神の軍団」も、生身の人間には違いない。傷つけば血が流れるし、戦いが続けば疲労も溜まる。そして何より操兵の補充はきいても、それに乗る騎士の補充がほとんどなされなかったことが大きい。

だが聖騎士は重い体に鞭打ち、次の戦場に向かう。身を神と教会と騎士団に捧げた彼らの姿は、崇高としか形容しようがなかった。

《第四階梯聖騎士イスルギーン・ツベルクが母親にあてた書簡より抜粋》

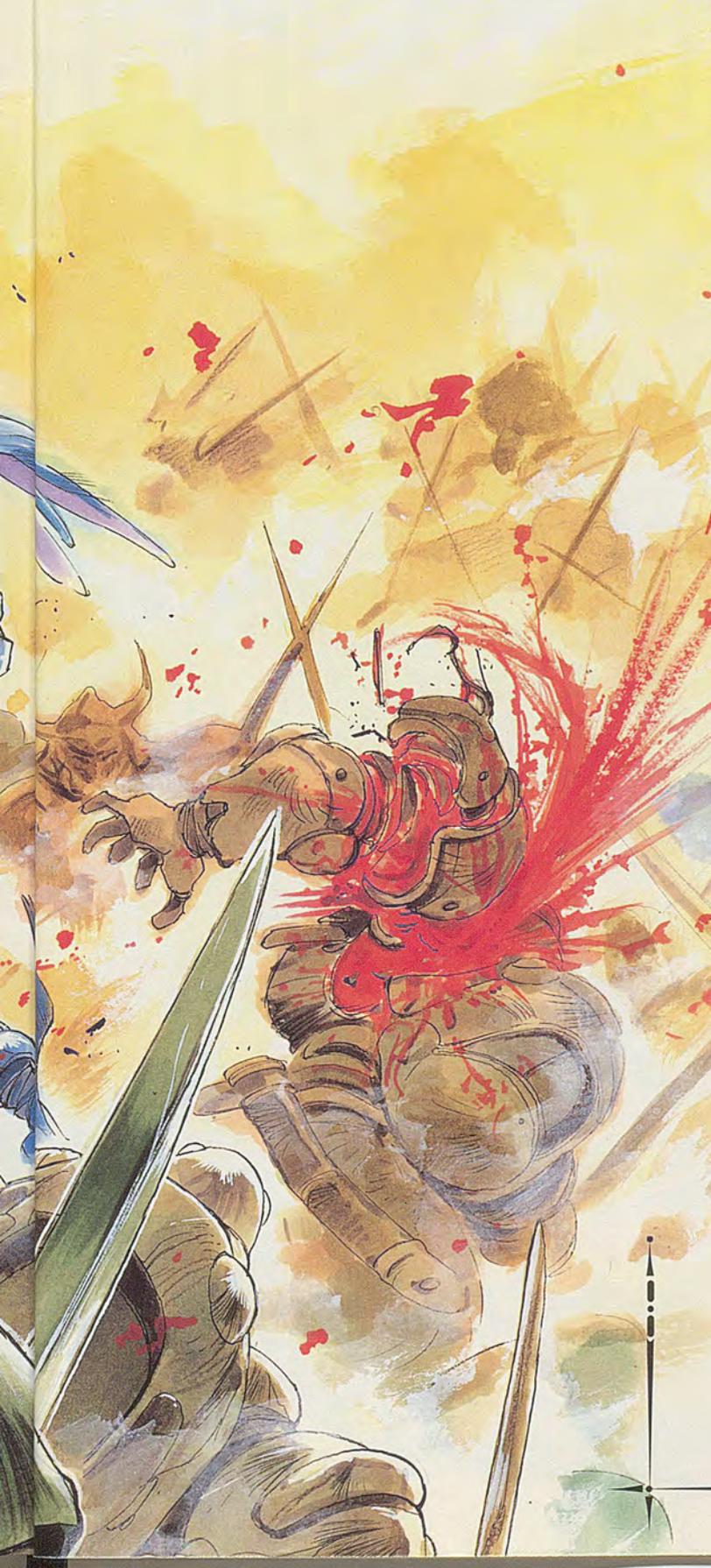
二四四五年一〇月十五日
南部域アリア国ボランにて

「母上、お加減はいかがでしょう。伯母上が胸の具合がよろしくない、と教えてくださり案じております。ここ南部域は晩秋の季節と思えぬ暑さですが、そちらでは一段と寒くなる頃でしょう。どうかご自愛ください。この度、わたくしは第四階梯に昇格し、三

人の部下を預かる身となりました。しかしながら、この昇進も上級者が戦死を遂げた結果と思ふと素直に喜べません。配属されてきた部下も、一五にもならぬ子どもばかりで、果たしてどれほどの働きができることか。いえ、何よりも彼らの命を預かる者として、何人を生きて故郷に返してあげられるか。

悪いことばかりではありません。損傷著しかった自機に代わって、新たに《レイファーン・ティーン》が回ってきました。軽快な動きをする素晴らしい機体です。先日の《ボランの戦い》では八騎もの戦果をあげました。きつと未長いつきあいになるでしょう」

（この書簡も書き直しを命じられる）





教会暦二四四七年、トールハルの戦い

無敵の「神の軍団」も、七年にも亘る戦によって極度に弱体化していた。《大動乱》最後の戦いである「トールハルの戦い」開始の時点では、騎士の総数は最盛期の三分の一まで落ち込んでいた。また本拠地から戦場が遠ざかったことで補給も滞りがちとなり、最悪の状態で、西部域の雄ライリツ国と戦わなければならなかった。

総大将のラドウ・クランド団将は、教会に恭順を示した西部域の諸国に援軍を要請するが、強大なライリツの軍勢を恐れ、諸国は中立の立場をとった。

しかし軍を退けるわけにはいかなかった。騎士団が後方で戦力を整えようとすれば、それ以上に反乱勢力は力を増大させるからだ。ライリツ領のトールハル平原を主戦場としたこの戦は、序盤戦より物量においてはるかに勝り、地の利を持つライリツが押した。聖刻騎士団は、騎士全員が不退転の決意で臨み勇戦を続けるが、気力だけではどうにもならず潰走寸前まで追い込まれた。

が
ハグドーンの豪族、グッテン・カムリ率いる援軍が駆けつけ、ここに戦局は大きく変わった（この功績によりカムリ家はのちに《八聖家》入りし、新設された西部域方面軍《四狼騎士団》の軍將に任じられる）。

勢いを得た聖刻騎士団は、ライリツ軍を撃退し、最後の戦を勝利で飾った。

《第四階梯聖騎士イスルギーン・ツベルクが、
母親にあてた書簡より抜粋》

二四四七年六月二三日

西部域ライリツ国トールハルにて

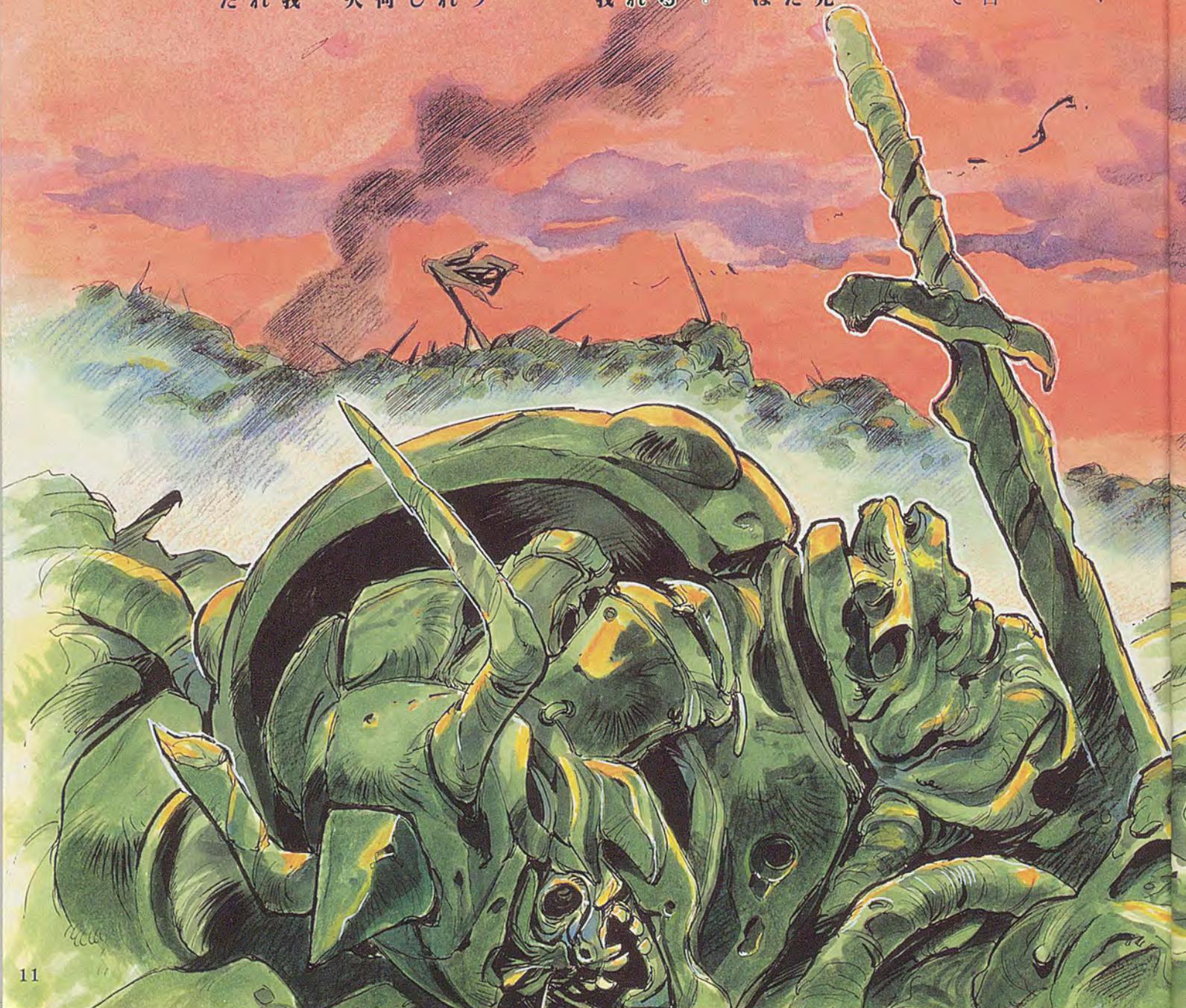
「母上、最後の戦いが終わりました。

わたくしは昼間トールハルの戦場に立ち、
夥しい操兵の残骸を見ました。多くは我が兄
弟が乗っていたものです。戦いには勝利いた
しましたが、実際の損害は敵軍より味方のほ
うが多かったです。

わたくしの部下も全員が神に召されました。
最後まで従ってくれた部下は、息を引き取る
前にわたくしの手を握り、『これで平和が訪れ
るのですね』と訊きました。『もちろんだ。我
らはやり遂げたのだ』といってあげました。
穏やかな表情で部下は息をひきとりました。
わたくしは嘘をついたのです。

確かに戦には勝ちました。けれどライリツ
は未だ強大な軍事力を残しております。これ
は間違はなく後の火種となるでしょう。そし
て我が騎士団は、元の戦力を取り戻すのに何
十年もかかります。再び火が起これば誰が火
を消すのでしょうか。

時もないことを書きました。ともあれ、我
らは最後まで戦い抜いたのです。平和が訪れ
るのだと信じなければ、死んでいった兄弟た
ちが浮かばれないでしょう」



教会暦二四四八年 《大動乱》終結

二四四七年一〇月六日、教都ワースランは東方各地から訪れた巡礼者によって埋め尽くされた。クラマツソ大聖堂が建つ丘に姿を現したアショールカ法王は、聖刻教信徒に向かって高らかに動乱の終結を宣言した。

時代は再生の時を迎えて人々は沸き立った。しかしながら真の意味での平和が訪れたわけではなかった。

聖刻騎士団の活躍により、教会は戦後処理における主導権を得る。だが新たな秩序構築には、越えねばならない多くの障害があった。

《大動乱》によって古い国が減び、それに代わる新しい国が生まれた。領土の線引きはいつの時代も容易には解決しない問題だが、戦火の及ばなかった北部域を除く東方全土が対象となるだけに調停は困難を極めた。

そして二四四八年一月二二日、アショールカ法王が崩御する。突然の死だった。

数年前より自らの死期を覚っていたらしく、騎士団に鎮圧を急がせたのも、己の命が残る間に《大動乱》の決着をつけたかったのではと推測される。

第五階梯聖騎士イスルギーン・ツベルクが、母親にあてた書簡より抜粋

二四四八年 一月三日
東部域ク・ダン国にて

「母上、アショーカ法王、陛下がみまかられました。敬愛するラドウ・クランド閣下の勇退に引き続き、我ら騎士団員は動揺を禁じえません。」

わたくし自身、胸に大きな穴が開いたような気がいたします。戦乱の終結とともに、ひとつの時代が終わり、新たな時代が幕を開けたことを意味するのでしょうか。

先月より始まった大増員計画により、我が部隊にも新しい騎士が配属されてきました。兄弟とは呼びたくもない下衆な男たちです。信仰心のかけらも感じられません。

各地で続く争乱を鎮めるために、早急に騎士団も陣営を整えなければなりません。裏の事情は理解しておりますが、やはりクランド閣下が懸念されていた通り、安易に人を増やせば騎士団そのものが腐敗する危険すらあります。正直、胸中はやり切れない思いで満ちております。新総長に就任されたジャン・ストラ団長閣下が、雨止めをかけてくれることを願うだけです。

追伸、米月にはようやく帰休が許されるそうです。母上にお逢いするのは、何年ぶりになるでしょうか。その日が楽しみです。」

(イスルギーンが最後に書いたこの書簡は、結局故郷に送られることはなかった。検閲に回す以前に受け取り人である母親の死が報されたためだ)

法王庁も何を考えてこのような連中を採ったのやら

だがアショーカ法王は崩御し、あのラドウ閣下も騎士団を引退した。そしてイスルギーンも……。イスルギーンはいいような虚しさに襲われ、酒に逃げた。



聖刻列伝

聖刻を彩るものたち

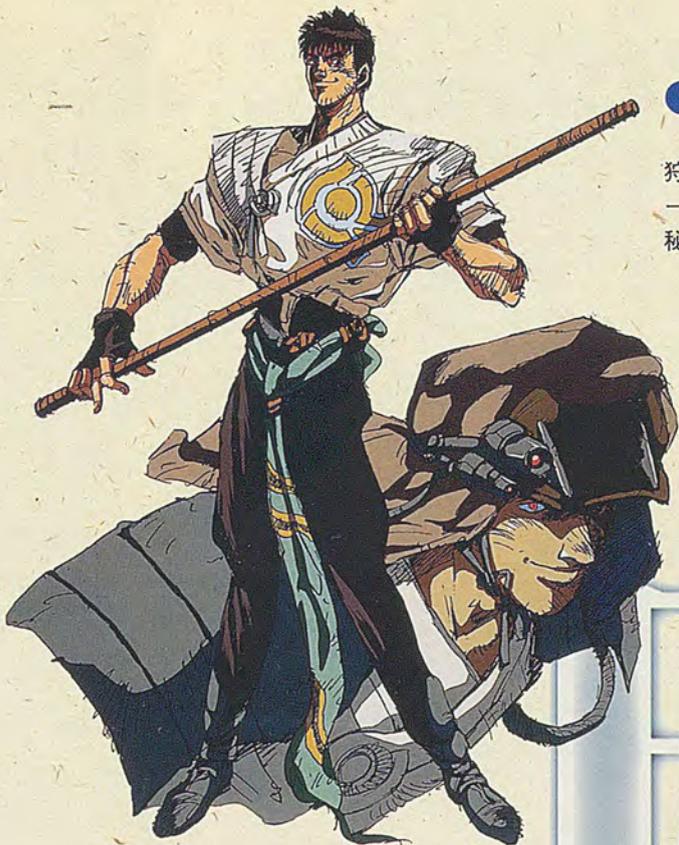
■ニキ・

ヴァシユマール■

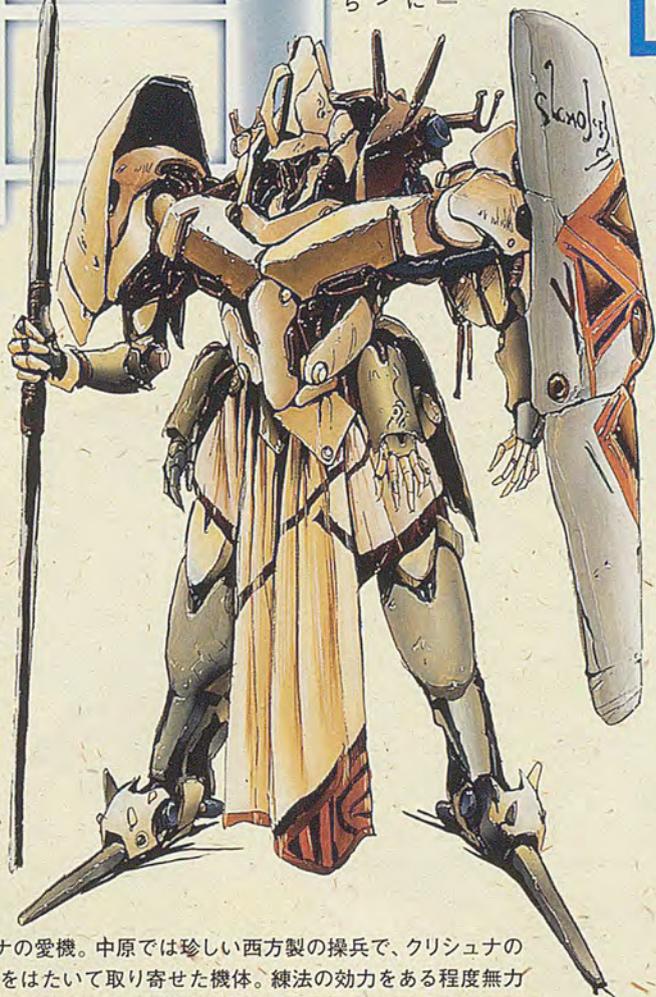
フェンの駆る操兵。父親ハオの唯一の形見として残された古の操兵で、世界を司とる「八の聖刻」の《白き操兵》の一体。聖都アラクシャで眠りについていたが、ハオの手によって盗み出されフェンに託された。背中には聖剣エル・ミュートが備えられている。

●フェン●

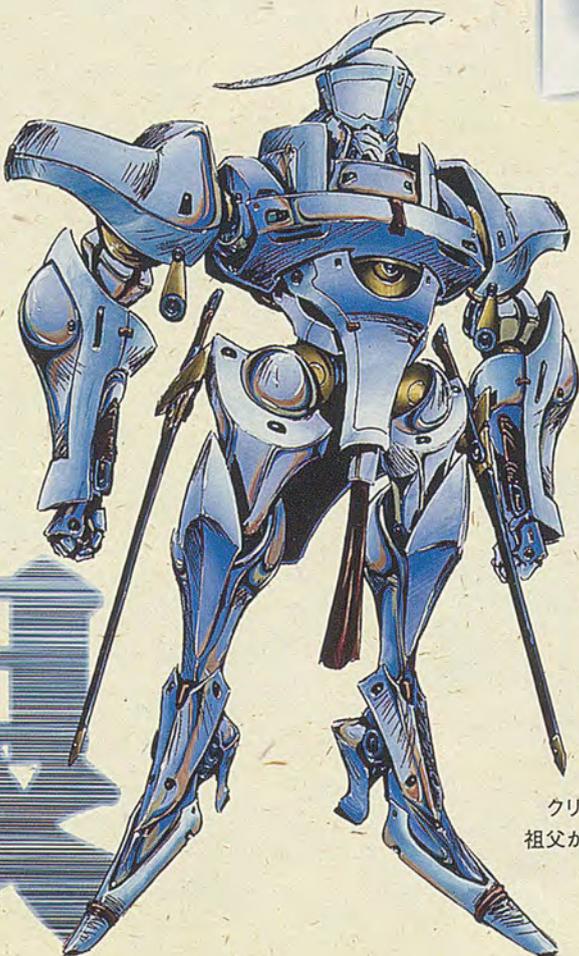
ラマス教の見習い僧侶拳士。亡き父が遺した古代の狩猟機《ニキ・ヴァシユマール》を駆り、広大無辺なアハーンの大を疾風のごとく駆け抜け、深淵たる聖刻の神秘と謎に挑む。



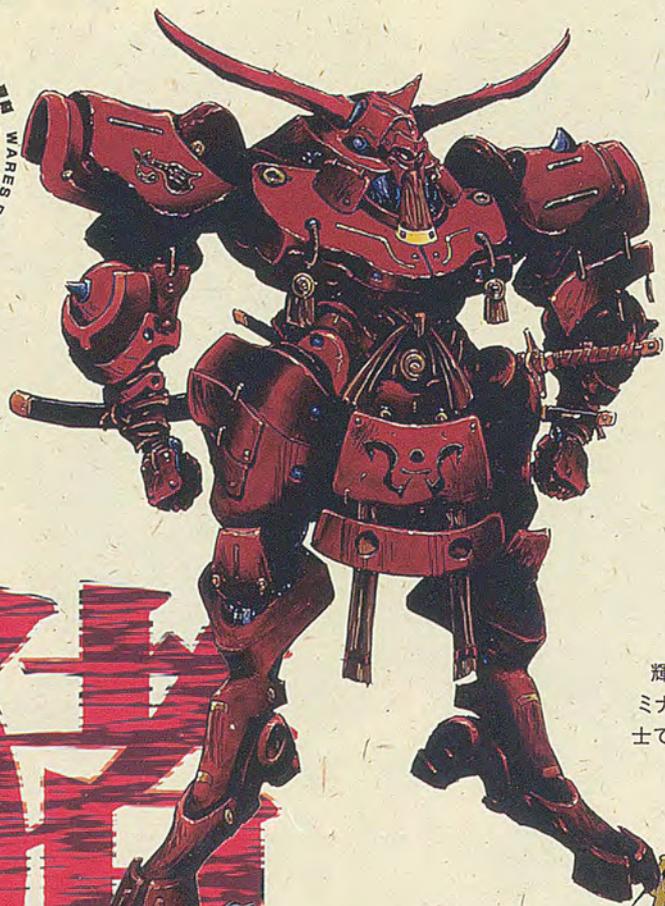
■アビ・ルーパ■



クリシュナの愛機。中原では珍しい西方製の操兵で、クリシュナの祖父が大枚をはたいて取り寄せた機体。練法の効力がある程度無力化する鏡面装甲を装備した最新鋭機で、両の腰にさげているのは聖剣アル・ス・レーテである。



聖刻1092
聖 大 全 刻
 WARES BLADE
 聖刻教会の機体



■パラシュ・バラハ■

ガルンの駆る赤銅の操兵。聖刻教会先々代法皇からストラ家が拝領した機体で、代々ストラ家当主の間で受け継がれてきた名機。ガルンは聖騎士に昇進したさいに父ジャンよりこの機体を譲り受けた。腰にさげているのは聖剣プレ・ヴァースキン。

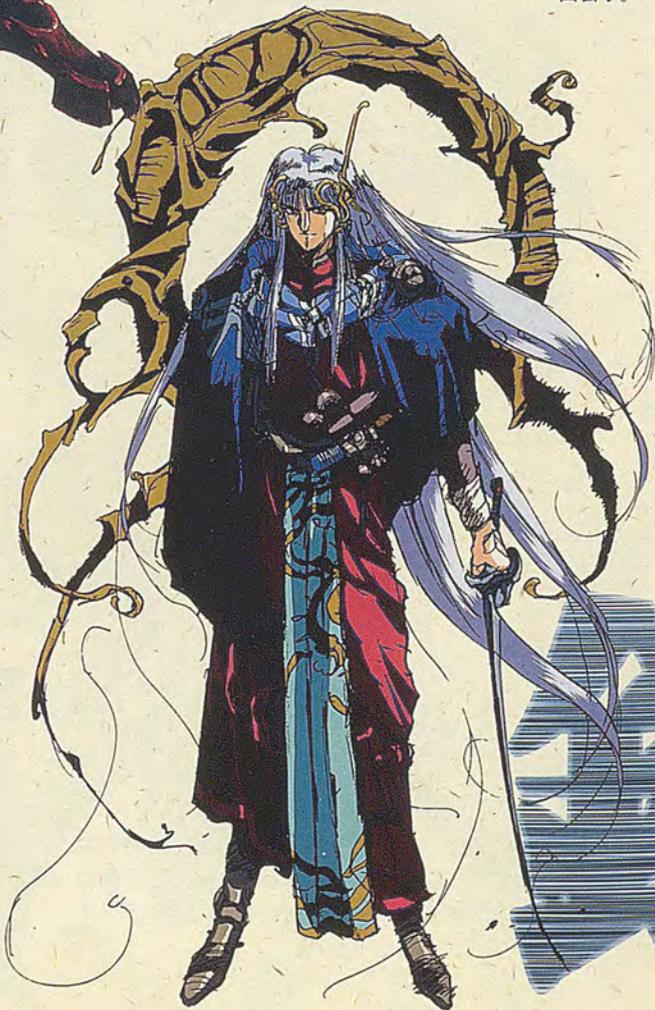
●クリシュナ・ラプトウ●

輝く狩猟機〈アビ・ルーバ〉を駆る銀髪の貴公子。西方ミナル人の血を引く。ダマスタ王国騎士団に所属する騎士であったが、故あって武者修行の旅へ出かけ、フェンと出会う。

●ガルン・ストラ●

狩猟機〈パラシュ・バラハ〉を駆る誇り高き東方の武人。聖刻教会八聖家の名家ストラ家の嫡子で聖刻騎士団の聖騎士だったが、陰謀によって無実の罪を着せられ破門される。

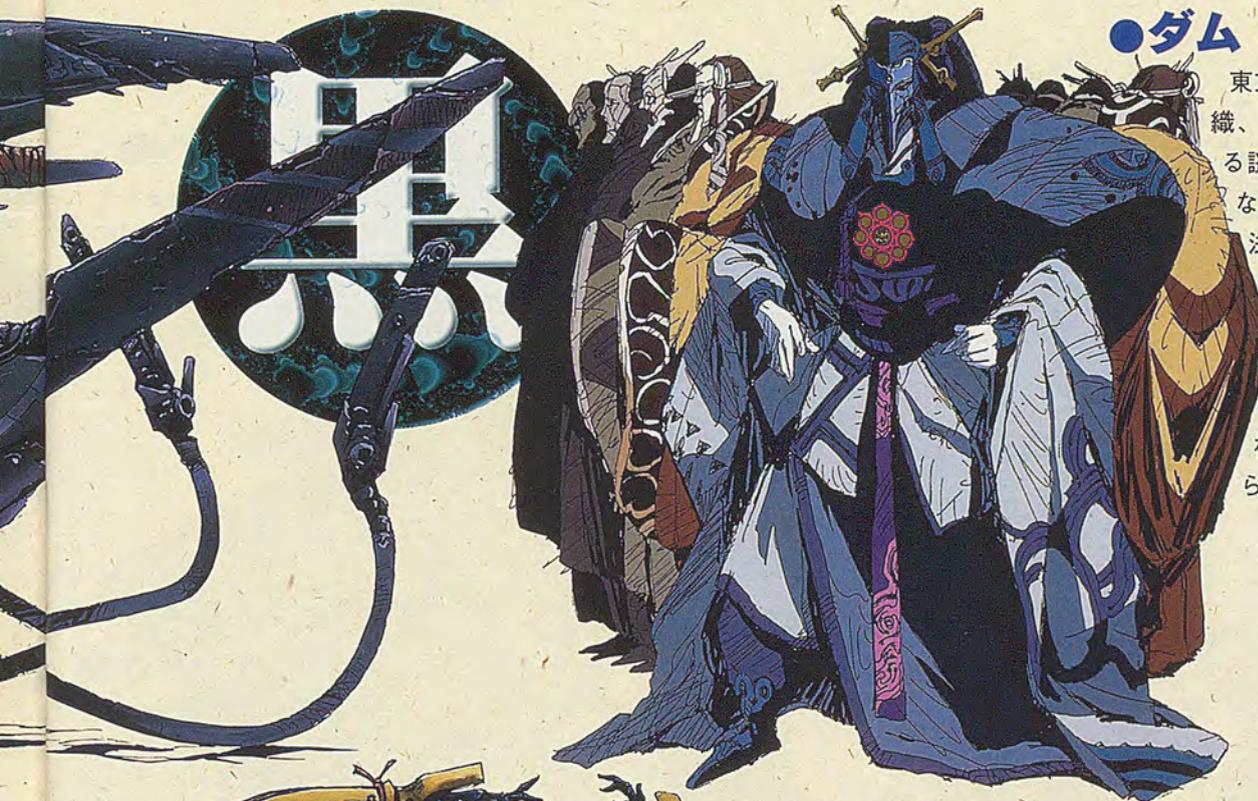
狩



機

●ダム・ダーラ●

東方聖刻教会の闇の組織、《聖華八門》を束ねる謎の人物。計り知れない力を操る恐怖の練法師である。“黒き操兵”の仮面に魅せられ、その使徒となる。世界を《黒》に染め上げるために様々な陰謀を張り巡らせる。



●ゾマ●

風の門の練法師。聖華八門の実質的な長として指揮をとる。他の練法師と比べても、なにか異なる雰囲気を持っている。風の門の術者としてはもちろんのこと、体術にも秀でたものをもっている。



■フェノ・ベルガ・ラハン■

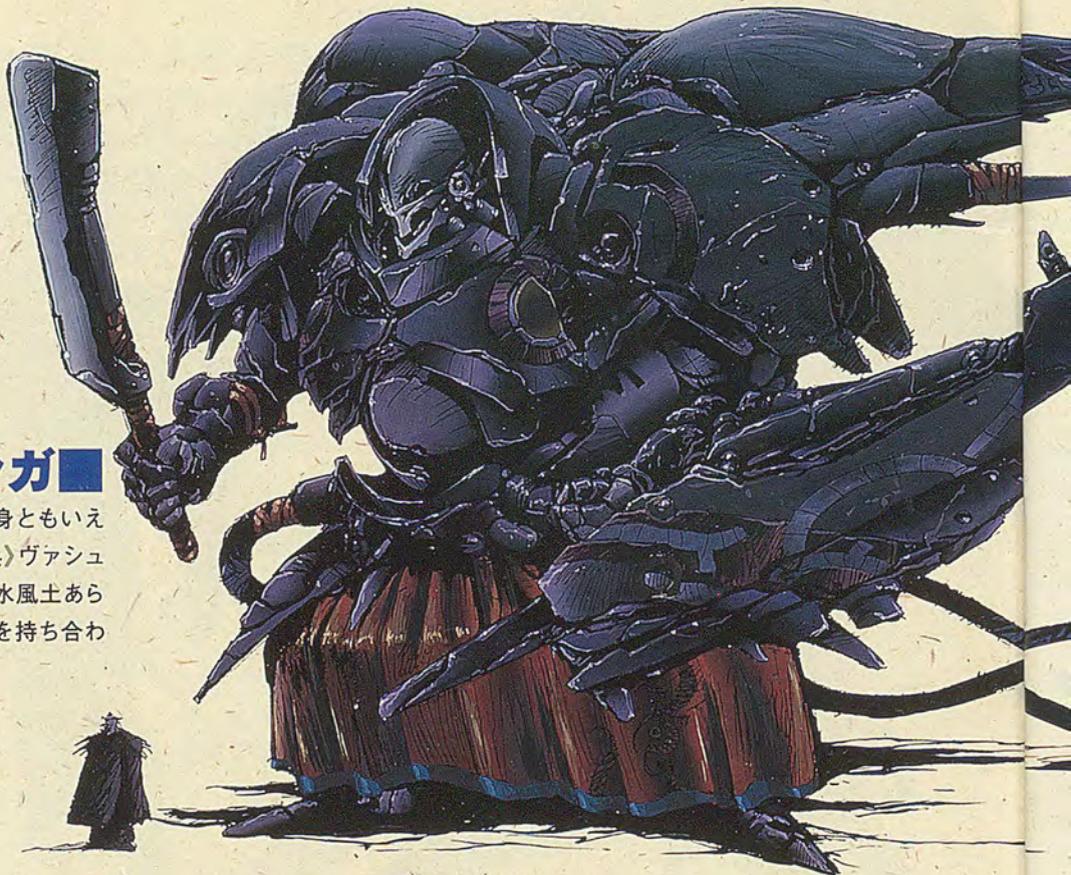
聖華八門《風の門》のゾマが駆る呪操兵。3本の剛腕と結印用の2本の腕を持つ異形の操兵。風を術の触媒としており、わずかでも風があればあらゆる気象を操作することができる。



■ハイダル

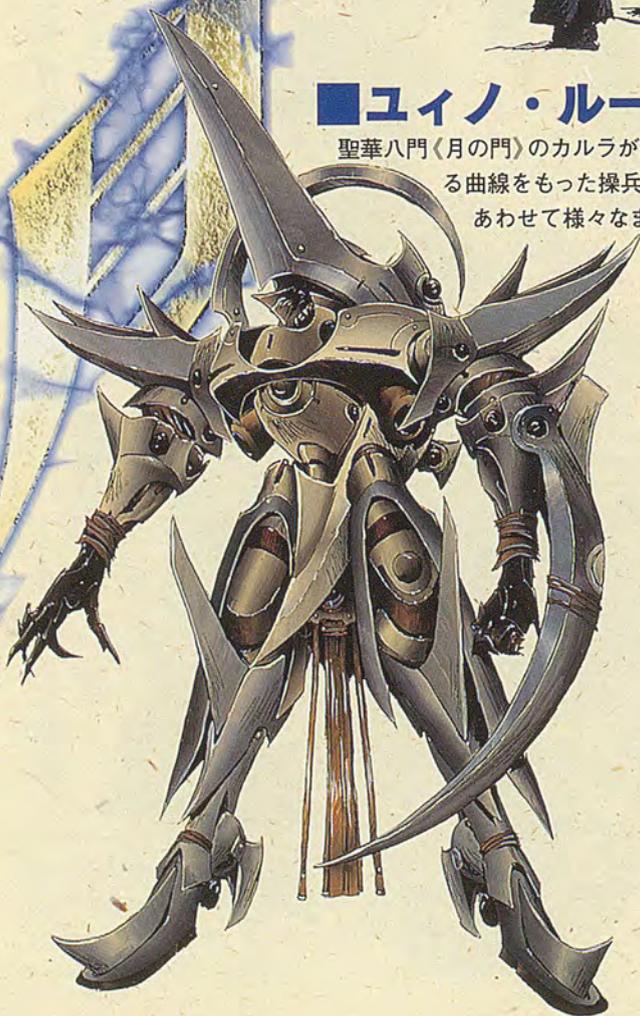
・アナンガ■

聖華八門の長、魔人ダム・ダーラの分身ともいえる操兵。〈八の聖刻〉のうちで〈白き操兵〉ヴァシュマールの対極にあたる〈黒き操兵〉。火水風土あらゆる力を自分のものとして変換する能力を持ち合わせている。



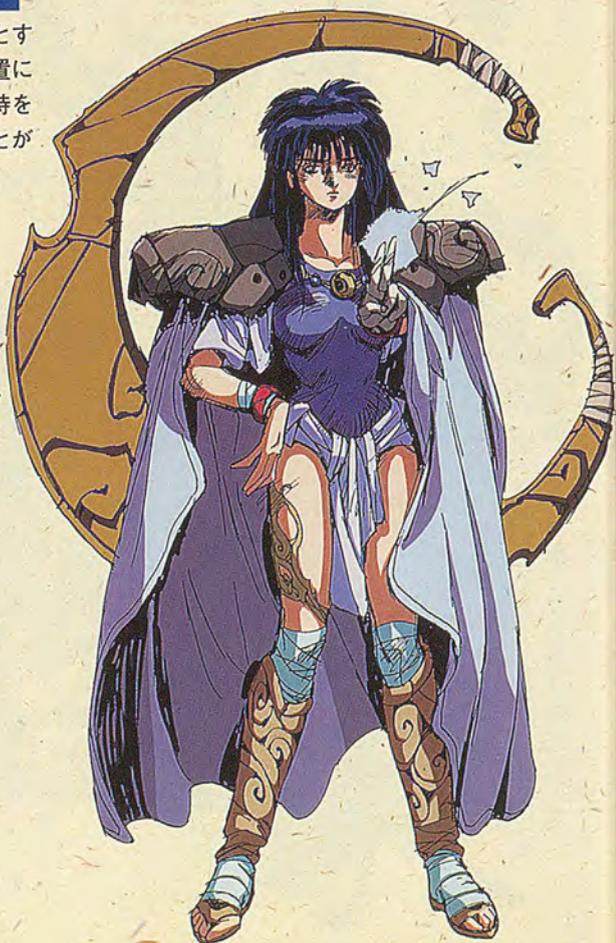
■ユィノ・ルース・ルウ■

聖華八門〈月の門〉のカルラが駆る呪操兵。月を象徴とする曲線をもった操兵で、月の満ち欠けと位置にあわせて様々なまやかしを現出し、闇、時を司る術を使用することができる。

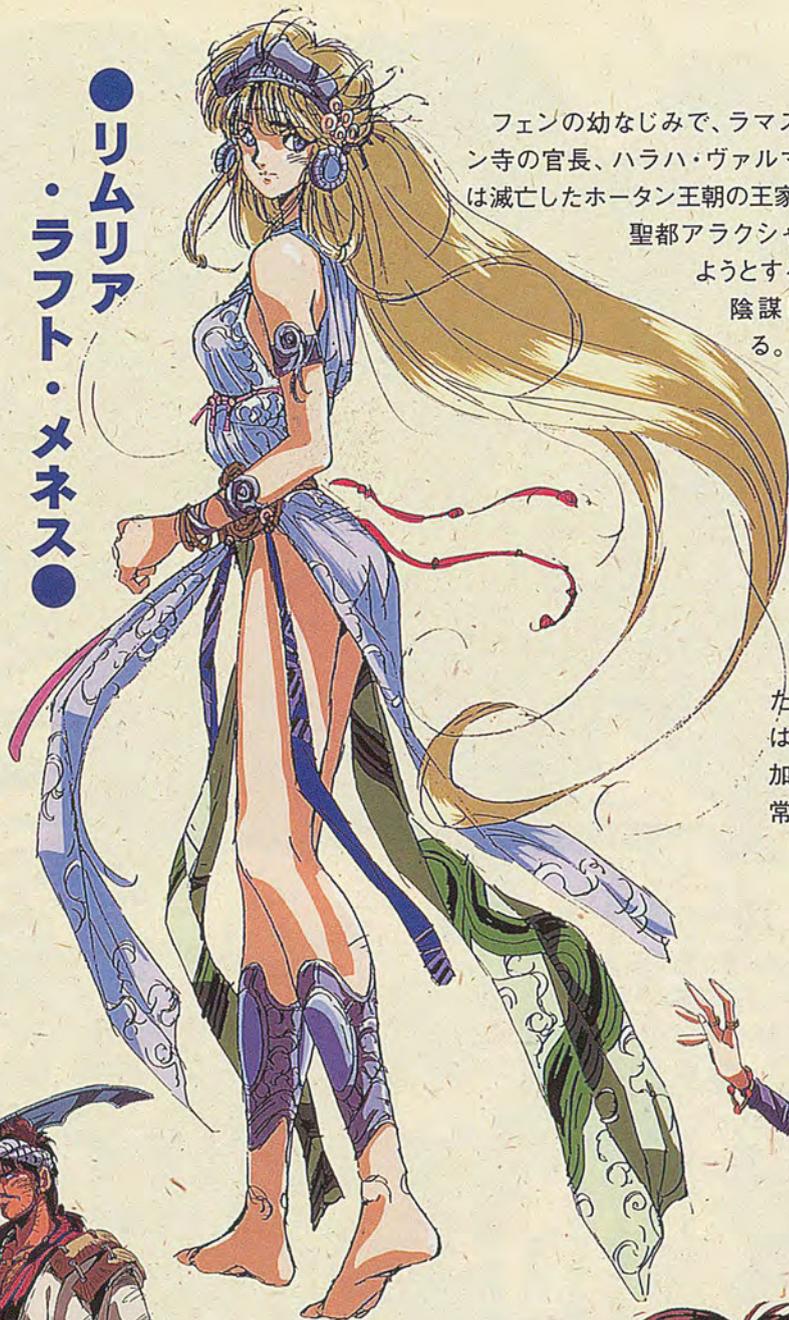


●カルラ●

月の門の練法師で聖華八門で唯一の女性術者。月の光を糧に時と闇を支配し、人の心を欺く影を操る。幾星霜を経た高位の術者ではあるが、その姿は妖艶な美女である。心の奥底にゾマへの「途な想いを秘めている」。



● リムリア
● ラフト・メネス ●



フェンの幼なじみで、ラマス教寺院ソーブン寺の官長、ハラハ・ヴァルマーの養女。実は滅亡したホータン王朝の王家の忘れ形見で、聖都アラクシャーを復活させようとする練法師たちの陰謀に巻き込まれる。

● イル・カタム ●



フェンの友人で、遊牧民ラウ族の戦士長。若いながら優れた統率力を持ち、民の信頼も厚い。また、騎馬の戦士としての勇猛果敢さもあたりに鳴り響いている。

● ジュレ・ミイ ●

旅回りの占術師に育てられた少女。大人びた口調で周りの人間を翻弄するが、まだ幼さは隠せない。養母の死を契機にフェン一行に加わる。敏感な感性の持ち主で、時として異常なまでに勘が鋭くなる。



●ガシュガル・メヒム●

傭兵騎士団グリーンワルズを率いる“蒼狼鬼”の異名をもった百戦錬磨の武者。どんな卑劣な行為も辞さぬ比類なき戦い方は、その名を知るものにとって恐怖以外のなにものでもない。



●ゼナム●

グリーンワルズにおいて、ガシュガルの副官を務める若武者。子供の頃から自分を鍛え育ててくれたガシュガルを親のごとく慕い、全幅の信頼をおいている。

■ガリオン
 ・シーカ■

恐怖の傭兵集団グリーンワルズの団長、ガシュガル・メヒムの手足ともいうべき操兵。いまはなき祖国、東方の小国時代から使用している機体を改造したものである。



■ツォノ・マ
 ・ソウグ■

削岩機を思わせる巨大な腕が特徴である、聖華八門（土の門）のダクトが駆る呪操兵。術の触媒に土を使用するため、その行動のほとんどは土中にて行われ、後部から伸びている潜望眼で地上の様子を探る。



■リイノ・ラ
 ・トウワング■

聖華八門（陽の門）のアルバが駆る呪操兵。機体上部の結印手は象徴である太陽を表しており、結界内で光、熱などの太陽の力を自在に駆使する。座っている台座は呪封座といい、巨大な呪封筒の類である。

炎

■シュノ・アグル

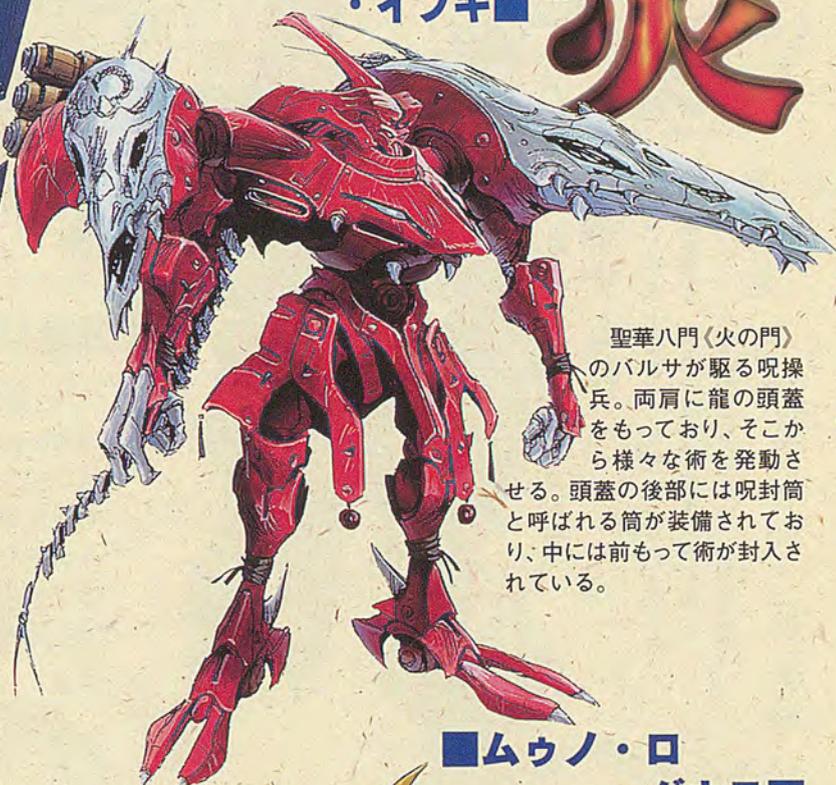
・ディケーロ■

■フォノ・エンゾーム

・イブキ■



聖華八門〈水の門〉のシータの駆る呪操兵。水晶をイメージさせるこの操兵は、水を触媒として様々な術を発動させる。河辺や湖、海などでは絶大な力を発揮する呪操兵である。

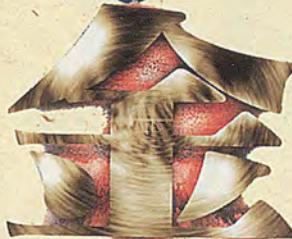


聖華八門〈火の門〉のバルサが駆る呪操兵。両肩に龍の頭蓋をもっており、そこから様々な術を発動させる。頭蓋の後部には呪封筒と呼ばれる筒が装備されており、中には前もって術が封入されている。

■キノ・ザウール

・ラギュラ■

聖華八門〈金の門〉のガルダが駆る呪操兵。操兵としては珍しく変形機能を持ち合わせており、普段は敏捷性が高くパワーのある獣型をしているが、高位練法を使用するときは人型となる。



■ムウノ・ロ

・グウラ■

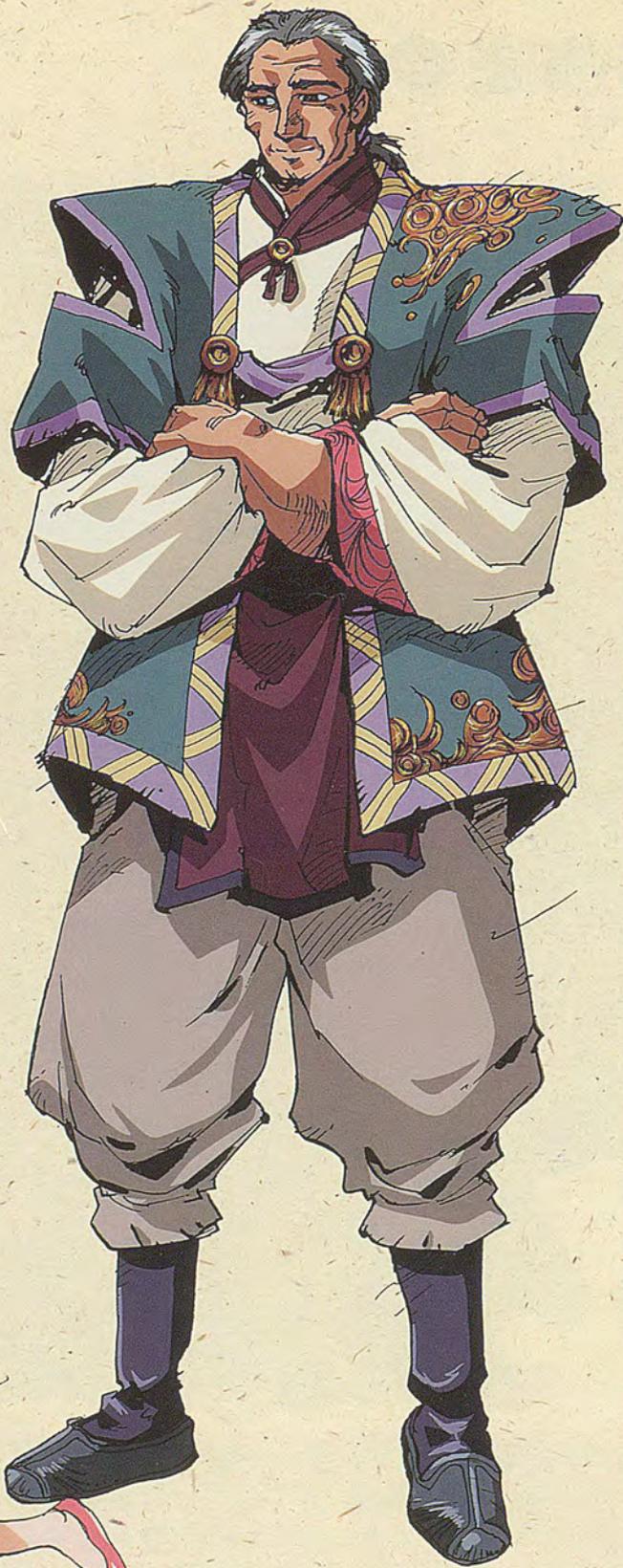


聖華八門〈木の門〉のラージャの駆る呪操兵。樹木を思わせる機体の特徴で、背部から伸びる樹操鞭を地面に突き刺し、樹木を操ることが

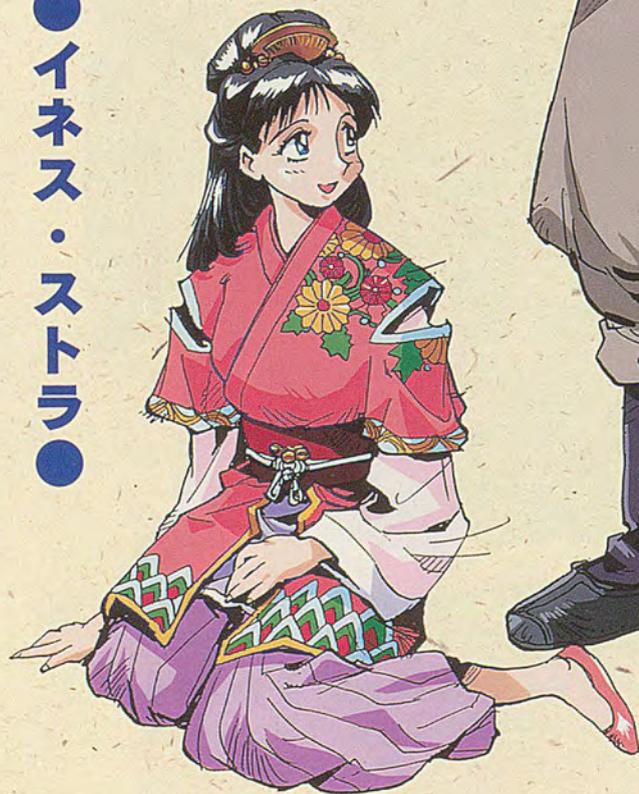
できる。練法によって植物材質で成型された外装は、植物と融合し機体に取り込むことができる。

ガルンの父親ジャン・ストラと妹のイネス・ストラ。質実剛健で厳格な性格のジャンは聖刻騎士団の団将だったが、教会内部の陰謀によって罷免され、現在は教都ワースランにて幽閉の身となっている。一人残されたイネスは、兄と父の無実を訴えるために、一路教都へと向かう。

●ジャン・ストラ●



●イネス・ストラ●



王 八聖家当主 ●



五聖エドン家当主ドワルド・メル・エドン。忠誠心と義侠心あつに篤い一族として、歴代法王と聖刻騎士団団
将に信頼されてきた名門第四聖ストラ家当主ジャン・ストラ。聖刻教会の頂点でありその象徴でもある現
法王ネーザ・ロズワルド・デ・ラ・オーム。僧侶を束ねる一族として代々教務団統轄総管区長の要職を務
めてきた第三聖カランダル家当主リクド・カランダル。最後にひそかに法王に助言を与えている謎の集団
“老”から送り込まれている監視役、大老タイト。



左から、聖刻騎士団団將を数多く輩出してきた名家、第一聖クランド家当主ラマール・クランド。教会の操兵製造に古くからたずさわってきた鍛冶の一族で鍛冶匠合を率いる第八聖ゴウラン家当主ユジック・ゴウラン。教会の金庫番ともいわれている商人の一族、第七聖センザン家当主ミシャージ・センザン。八聖家のなかではもっとも新参ではあるが、新進気鋭の武闘派である第六聖カムリ家当主グッテン・カムリ。聖刻騎士団のなかでは、クランド家について要職を担ってきたザトウク家前当主で、現在は家督を息子に譲り隠居しているラズバーン・ザトウク。「法王の知恵袋」と呼ばれ、智をもって教会を支えてきた名家第

●ワルサ・ジュマーダ●

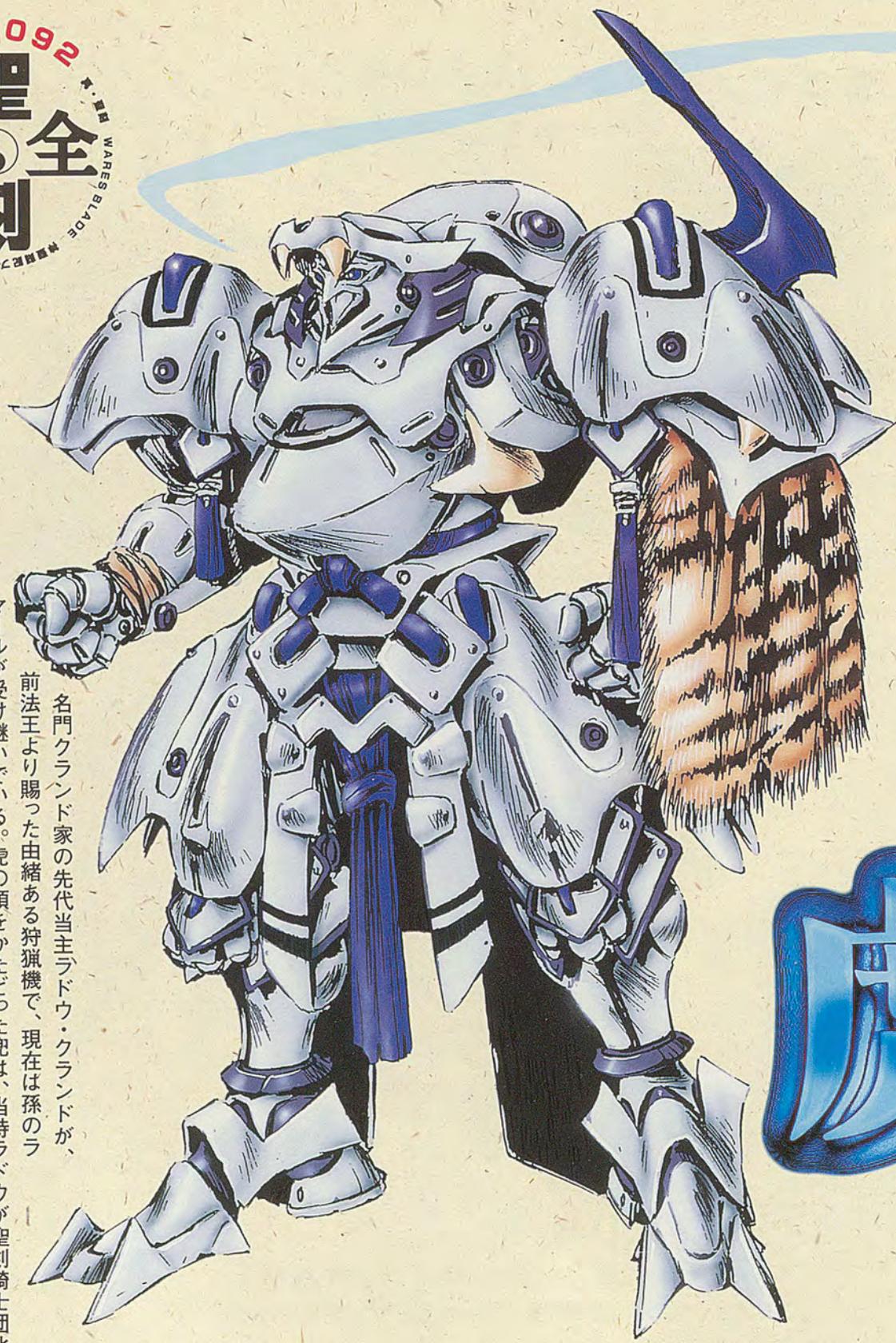
かつてラマールの小姓頭を務めたクランド家の重臣。八極流の名手で「北部の猛虎」という異名をもつ第四階梯の聖騎士。ラマールの剣術指南役も兼ねている。



●ラマール・クランド●

聖刻騎士団先々代団将であったラドウ・クランドの孫で、クランド家の現当主。祖父を殺害したといわれているガルン捕縛と教会にあだなす《白き操兵》を討伐するために、勅命軍を率いて教都ワースランを出発した。

■ シイフ・バイロン ■



虎

名門クランド家の先代当主ラドウ・クランドが、
 前法王より賜った由緒ある狩猟機で、現在は孫のラ
 マールが受け継いでいる。虎の頭をかたどった兜は、当時ラドウが聖刻騎士団北
 部方面軍、通称「虎」の軍の将についていたことに因^{ちな}んでいる。かつてはこの機体
 の腰にパラシュ・バラーハの聖剣プレ・ヴァースキンが吊るされていた。

■フェノ・ヤクーシャ
・キランディ■

紅



隠れ練法師の里に伝わる古操兵であり、聖刻教会製のものではない。左肩に龍の頭蓋を模した呪封筒発射器を装備する《火》の呪操兵である。

DATA：聖刻1092第2巻
「熱砂の貴公子」
カバーイラスト／幡池裕行



DATA：聖刻1092第3巻
「囚われの聖女王」
カバーイラスト／幡池裕行

DATA：聖刻1092第1巻
「旋風の狩猟機」
カバーイラスト／幡池裕行

DATA：聖刻1092第5巻
「雷光の秘操兵」
カバーイラスト／幡池裕行



DATA：聖刻1092第6巻
「光風の快男児」
カバーイラスト／幡池裕行



DATA：聖刻1092第4巻
「黒衣の練法師」
カバーイラスト／幡池裕行

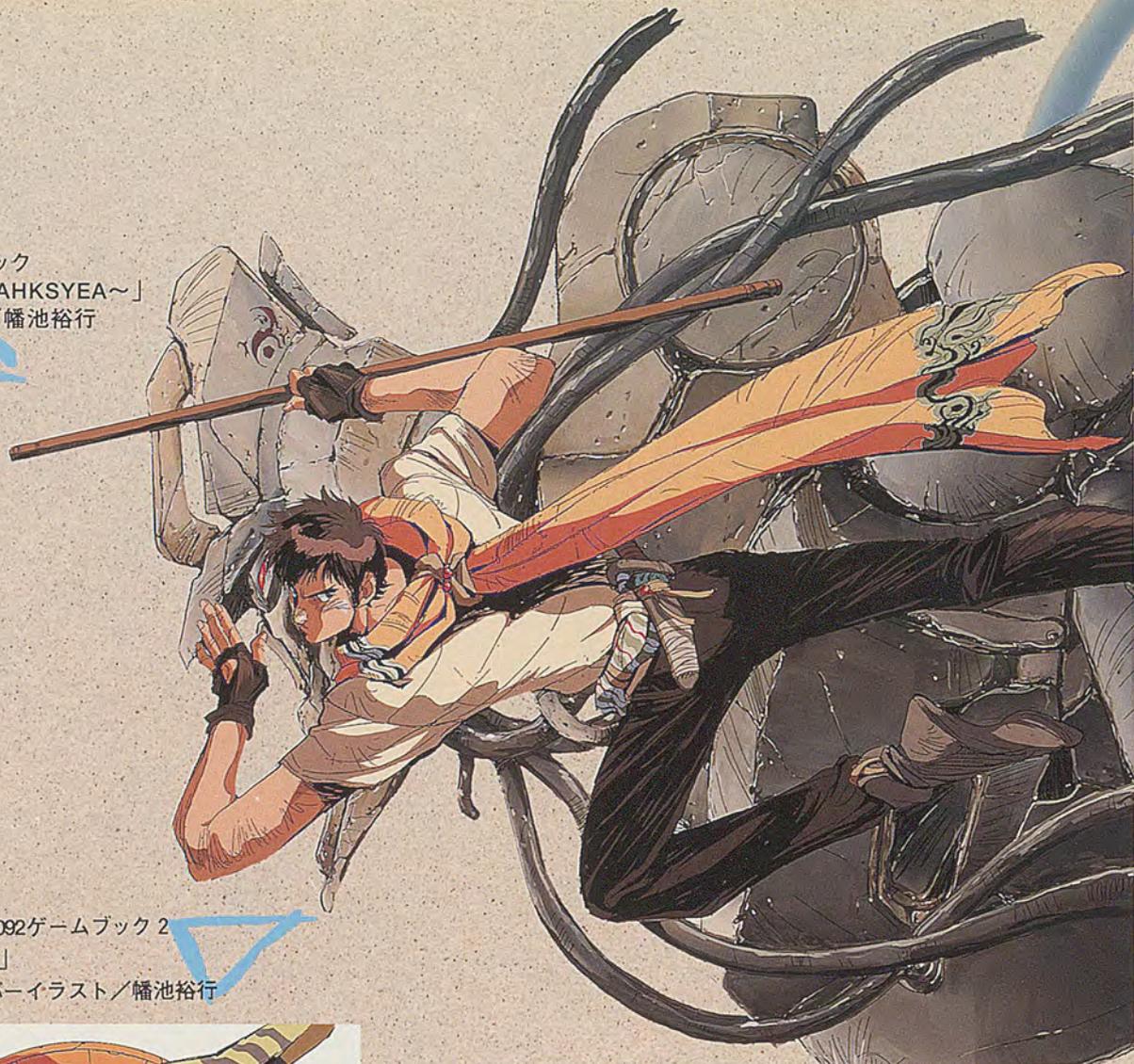
聖刻全



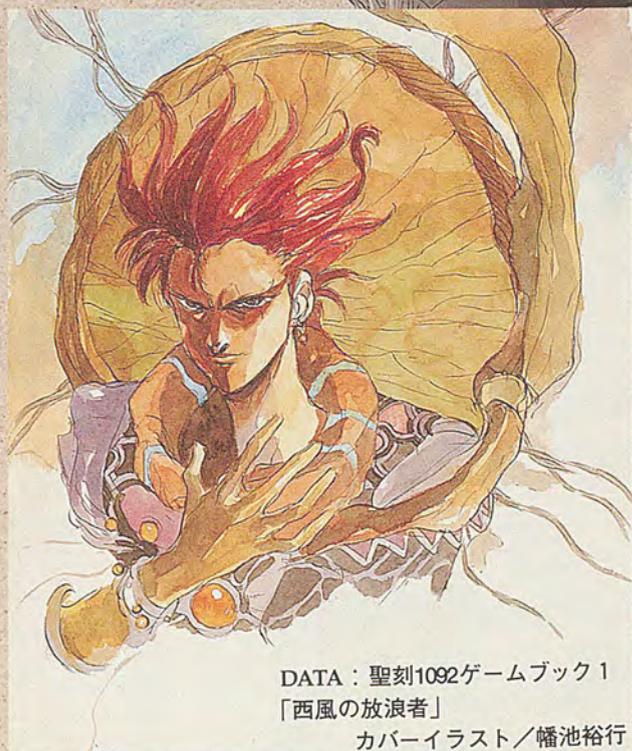
DATA：聖刻1092外伝1
「中原の砂塵」
カバーイラスト／幡池裕行

DATA：聖刻1092外伝2
「東方の嵐」
カバーイラスト／幡池裕行

DATA：聖刻1092ムック
「聖都～ALLAHKSYEA～」
カバーイラスト／幡池裕行



DATA：聖刻1092ゲームブック 2
「荒野の探索者」
カバーイラスト／幡池裕行



DATA：聖刻1092ゲームブック 1
「西風の放浪者」
カバーイラスト／幡池裕行

新たな地“東方”へ
第二部表紙絵集

DATA：聖刻1092東方編第1巻
「彷徨の三操兵」
カバーイラスト／幡池裕行



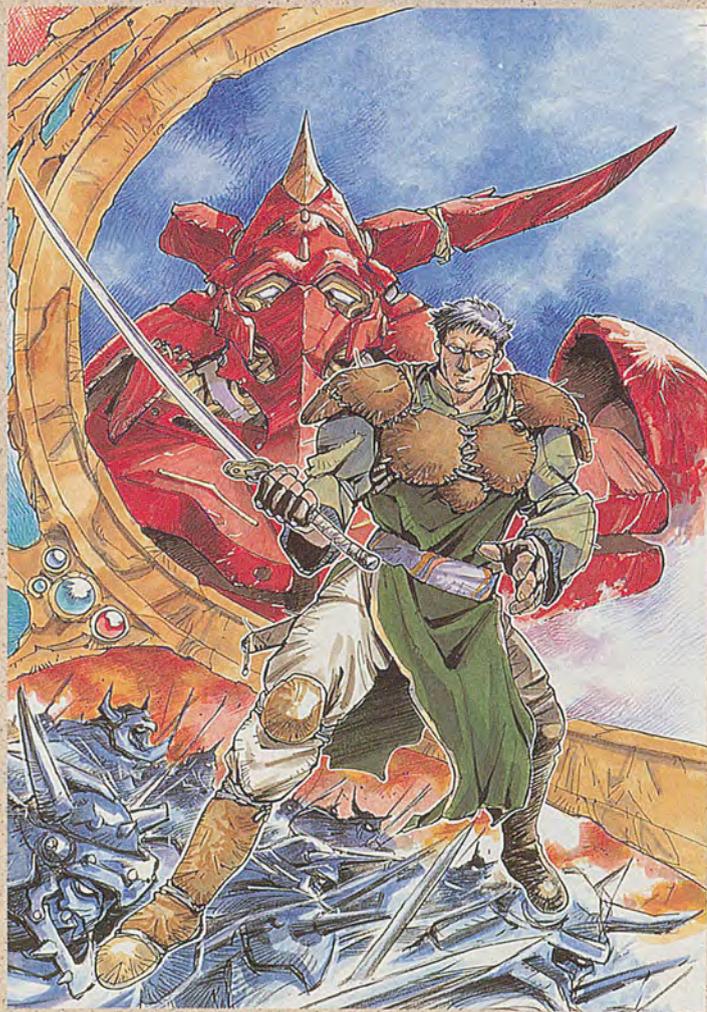
DATA：聖刻1092東方編第2巻
「アグの大河」
カバーイラスト／幡池裕行



全

聖刻1092
 聖
 大 全
 刻
 WARES BLADE
 神宮寺一樹
 神宮寺一樹
 神宮寺一樹

DATA：聖刻1092東方編第4巻
 「朔風の聖騎士」
 カバーイラスト／神宮寺一



DATA：聖刻1092東方編第3巻
 「怨讐の呪操兵」
 カバーイラスト／神宮寺一

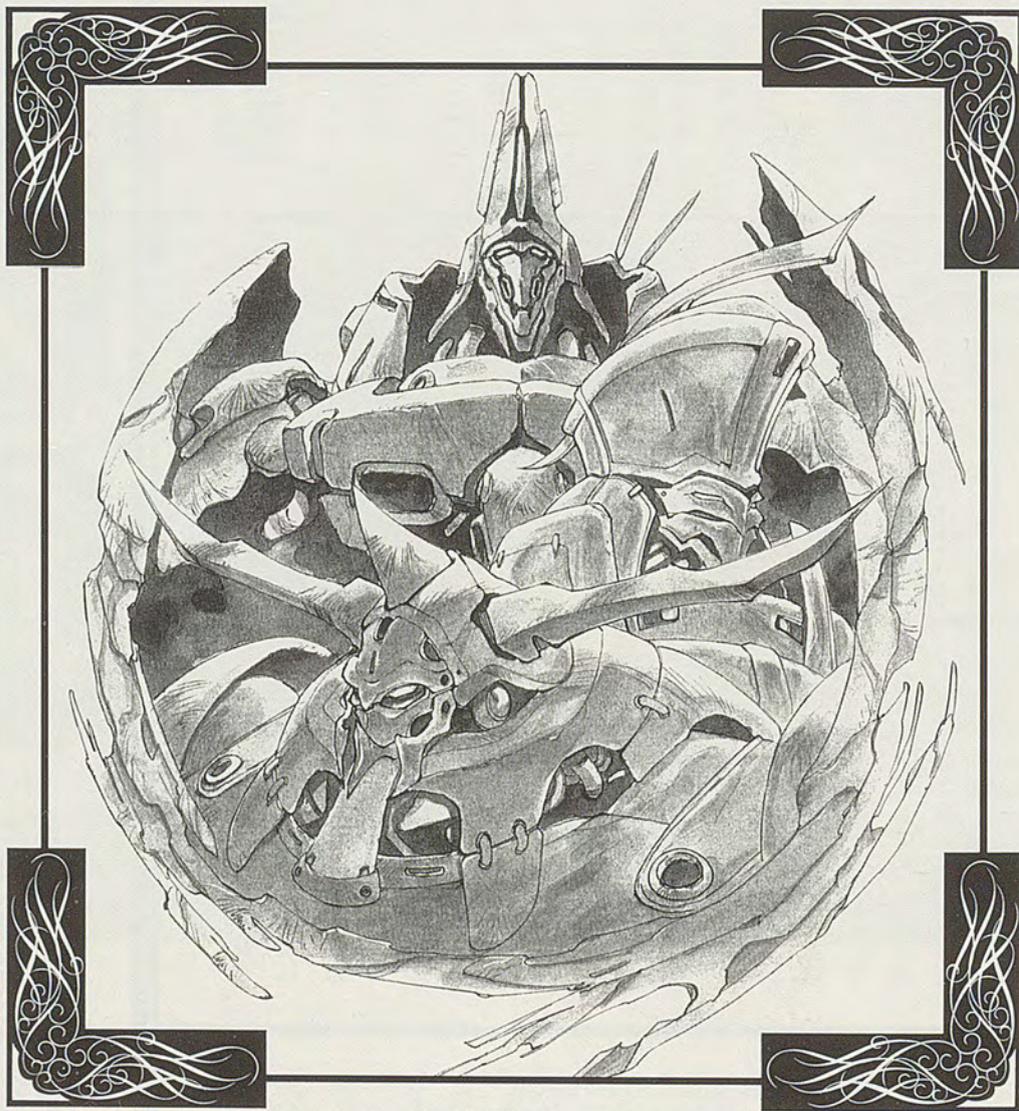
聖
 大 全
 刻



DATA : 聖刻1092東方編第5巻 「聖刻教会の陰謀」
カバーイラスト/神宮寺一



聖刻1092の世界



●大地●中原●中原の宗教●東方●東方の宗教●聖刻騎士団

聖刻1092
の
世界

大地

聖刻の力満ち溢れる大地アハーン。そこで繰り広げられる様々な現象、事象、人間模様。人は常に聖刻の恩恵を求めて争いを続け、アハーンはそのすべてを見守ってきた。父であり、母であり、友であり、敵であるこの大地に聖刻の力ある限り、人の物語の尽きることはない。

「アハーンとは」

古の言葉で「ふたりの神」、あるいは「わかれた言葉、力」という意味のアハーンという名を持つこの大陸は、三つの地域によって構成されている。

まず、大陸の東地域は〈東方〉と呼ばれ、〈聖刻〉の偉大なる力を崇める宗派によって統合が計られ、神秘的、呪術的な要素の色濃い文化圏が存在する。

一方、西地域は〈西方〉と呼ばれ、東方とは異なる唯物主義的な文化圏が存在し、日々生産に従事するある一つの組織によって調和

が計られている。この二つの文化圏は〈交易路〉と呼ばれる道によって結ばれ、相互交流がなされている。

東方、西方の中間に位置するのが〈中原〉と呼ばれる地域である。中原は他の地域の倍以上の広さを持ちながらも、人跡未踏の地が多く、未だ開拓期にあるといっても過言ではない。統制のとれた文化圏はほとんど存在せず、交易路によってもたらされる東西どちらかの文化の影響を受けている地域が大半である。

だが、この交易路によりもたらされるのは文化ばかりではなかった。この幾

千幾万リーにもおよぶ長き道は、太古の昔から今日に至るまで、果てることのない戦乱をも運んできたのである。中原は常に東西両文化圏の標的になり、度重なる侵略を受けてきた。さらに中原制覇を唱える諸国の争いも多く、戦乱の尽きることはなかった。

アハーンでは、総ての事象は聖刻の計らいによるものという思想が強く根づいている。それは聖刻を信仰する東方の民だけにとどまらず、目に見えるもの以外を信じない西方の民ですら例外ではなかった。

聖刻はあらゆる事象を司

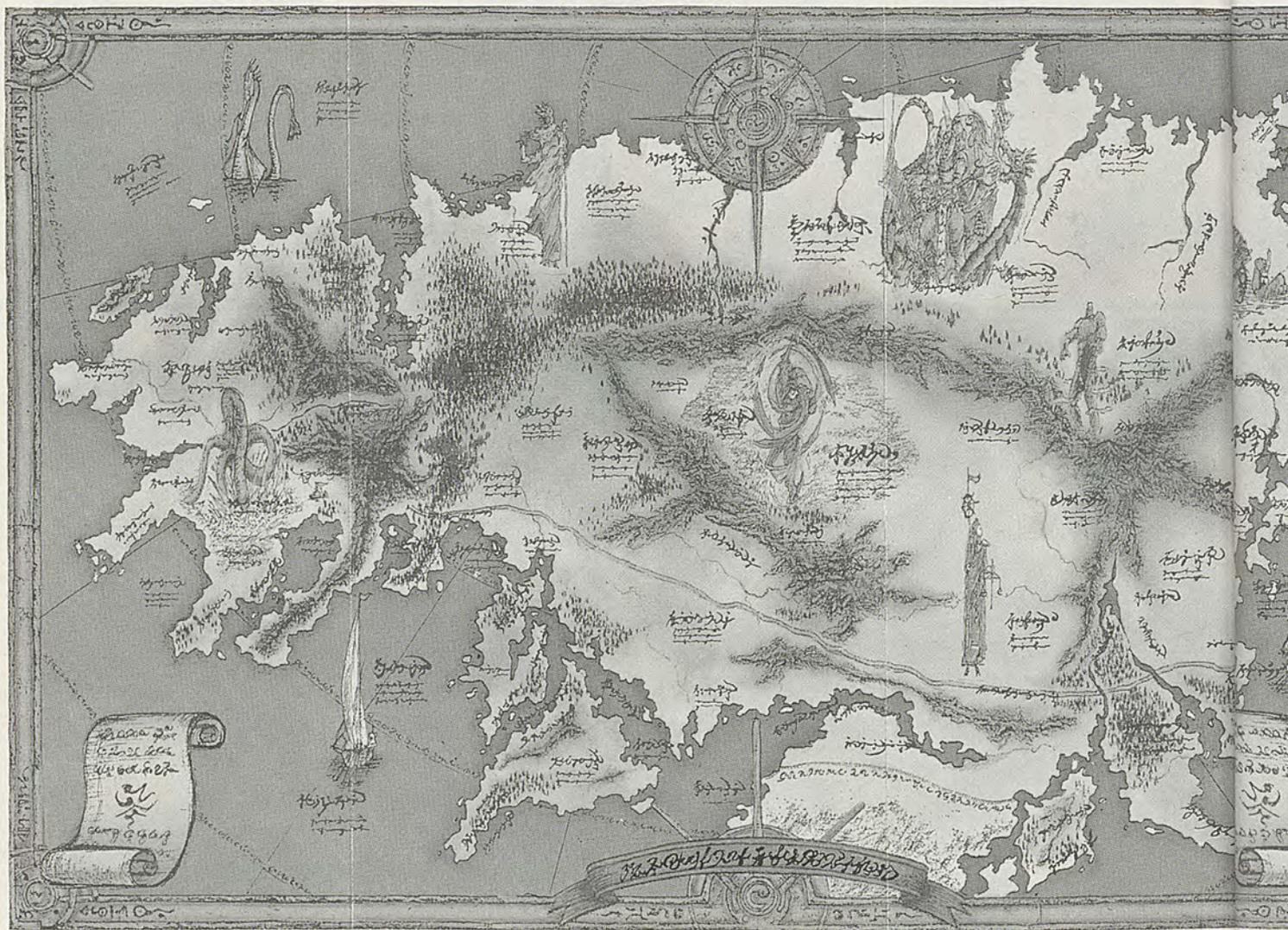
る力にして意志とされ、運命の同義語としても語られる。人が大地に生を享けるのも、争いによって終末を迎えるのも聖刻が定めし運命であると。

長い歴史の中で、やがて人はこの聖刻の力を体現する術を手に入れる。聖刻の力が宿った鉱石〈聖刻石〉から、その力を導き出すのである。この石から導き出される奇跡の技は〈練法〉と呼ばれ、聖刻の力を信仰の対象としている東方などは、率先して練法を学問や技術の体系として伝えようと研究を進めている。そして高度な知識を備え、厳しい修行によって術を習得した者は〈練法師〉と呼ばれた。練法師は日々聖刻の真

理を求めて大陸中を徘徊し



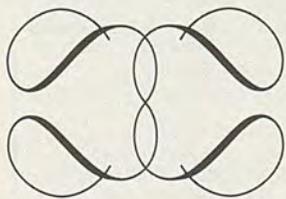
◎ 聖刻大全 ◎ 聖刻1092の世界



理を求めて大陸中を徘徊しているともいわれている。

この練法とは別に聖刻の力を具現化するものとして《操兵》が存在する。操兵は古の技をもって生み出された巨人騎士で、伝承では意志を持ち、神の代行者として民を統べていたともいわれている。しかし現代に蘇った神の代行者はかつての力を失い、人によって操作される武具と成り果てた。民は競ってこの聖刻の巨人騎士を求め、《操兵》を得た者は強大な力を手に入れることとなった。

数々の聖刻の奇跡によって成り立つアハーン。人は聖刻の掌の上で踊らされるように生まれ、争い、そして死んでいく。大地はその果てしない繰り返しをじっと見守り続けているだけである。



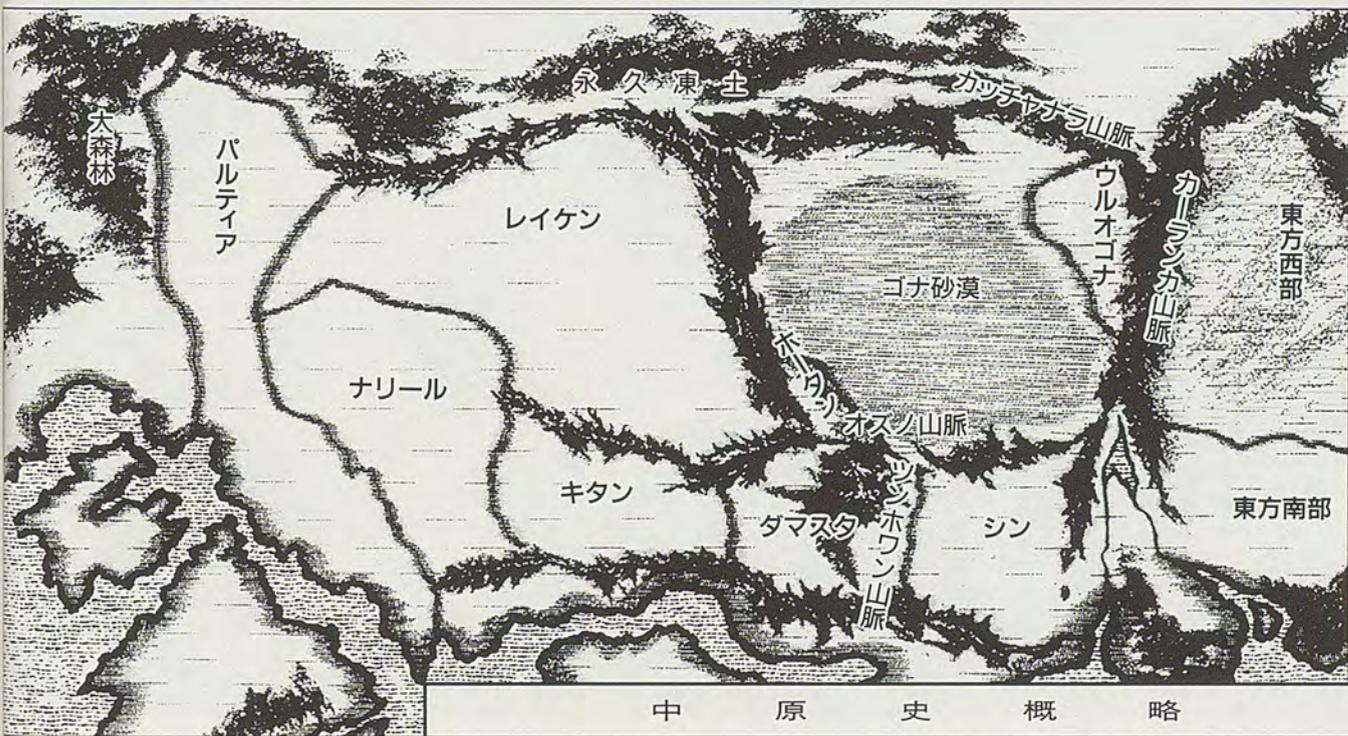
聖刻1092の世界

『中原』

アハーンの中央に位置し、最大の面積をほこる地域。しかし未だ人知のおよぶ地域は限られている。苛酷な環境のもと、人は広大な大地を旅し、新たな聖刻の奇跡を発見する。そこは〈中原〉、未知なる太古の歴史が今なお埋もれる地である。

【中原とは】

中原は大陸の中央に位置し、東方や西方の倍以上もの広大な地域を擁している。しかし、人が生活を営める地域は少なく、そのわずかな地域もほとんどが荒野や草原で、乾いた砂漠によって年々浸食を受けている。人々はささやかな農耕地を守り、子を生み、育てている。いまだ開墾されていない土地も多く、天災とも無縁なわけではないが、草原には遊牧民のひづめの音が高らかに響きわたり、秋の収穫時期ともなれば集落からは、実りを感じずる祈りと宴のさ



【中原全図】

中原史概略

元年	●古代帝国〈ラ〉の建国	1235年	●チェンの建国
564年	●〈ラ〉帝国、ラ・タン(東部域)、ラ・マン(南部域)、ラ・カン(西部域)の三国に分裂	1239年	●〈ダマスタ独立戦争〉勃発(〜1243年)
602年	●〈ラ三王朝戦争〉勃発(〜699年)	1240年	●ダマスタの建国
611年	●ラ・タン、滅亡する。以後、中原東部域はラ・カンの支配地となる	1244年	●ラウマーナ、帝国の解体を宣言。ホータン王朝に移行
919年	●ラ・カン、中原全土を支配	1398年	●〈東方戦争〉勃発(〜1401年)。ハムル地方が東方の手に落ちる
1098年	●〈第一次西方戦争〉勃発。西方ラウマーナ帝国、中原に進出	1435年	●チェン、国内遊牧民の反乱により滅亡。ウルオゴナ建国
1113年	●ラ・カン、東南部のウラカイに遷都	1487年	●〈ダマスタ=キタン戦争〉勃発(〜1490年)
	●ラウマーナ、ツンホワン山脈まで征服	1503年	●〈東方動乱〉勃発(〜1532年)
1118年	●ラウマーナ、アラクシャーに遷都	1510年	●シン、ハムル地方を奪回
1136年	●ラ・カン滅亡。シン建国(ウスリク王朝)	1518年	●〈第一次ダマスタ=ウルオゴナ戦争〉勃発(同年終結)
1155年	●西方北・西部域において反乱勃発。ラウマーナ帝国は西方領土の1/3を失う(西方暦1487年)	1522年	●ウルオゴナ、ホータンに侵攻。ホータン滅亡
1177年	●ラウマーナ=シン間に〈十年戦争〉勃発(〜1188年)	1527年	●ダマスタとシン、軍事同盟を締結
1231年	●現バルティア地方にあった副王都レミューラが陥落。バルティアの独立	1531年	●レイケン、南北に分裂(1535年に再統合)
			●ウルオゴナ、旧ホータン領を放棄
			●ホータンの復興
			●〈東アグの戦い〉

※暦換算 [中原暦0年=西方暦332年=東方暦915年]

ざめきも聞こえてくる。

東西二大文化圏から見れば、未発達に見える社会も、交易路を介して新しい文化を吸収し、成長の過程にあることは間違いない。だが、交易路の周辺には野望や術策が渦巻いている。東西交流の要衝たる中原では、東方、西方の思想が複雑に絡み合う。新たな知識の発見を求める西方工祝会と、聖刻の奇跡を探求する東部へと追いやられたカン王朝も内乱によってシンへと王朝

聖刻大全 聖刻1092の世界

る東方聖刻教会にとつて未開の地が多い中原は、恰好の標的なのである。中原進出を計る両組織は、綿密に、あるいは恣意的に中原に介入し、民は望む者も望まぬ者も、闘いに巻き込まれていく。

【中原の歴史】

中原の歴史は古代帝国(ラ)の建国に始まる。(ラ)は四世紀にわたって中原の三分の一を領土としたが、やがてはタン、カン、マンという三つの王朝に分裂、互いに争いを繰り返した。そして生き残ったカン王朝は、九世紀にはほぼ中原の全域を手中に納めていた。だが、ここに西方からの勢力が進出してきた。交易路に沿って東進してきた西方のラウマーナ帝国がカン王朝に戦いを挑んできたのである。後に(第一次西方戦争)とよばれるこの戦いによって、ラウマーナ帝国は中原西部から中南部までの地域を奪取し、カン王朝は中原東部に追いやられてしまう。ラウマーナの東進王は、中原支配を恒久的なものとするため、アラクシヤに壮大な都を築き、王都を移した。

その後、ラウマーナ王朝も十三世紀半ばには滅亡し、その領土はキタン、ダマスタ、ホータン、レイケン、パルティア、ナリール、チェンの七つの国家に分裂する。一方、



第一次東方戦争
中原に上陸した東方の軍勢にシン軍は瞬く間に打ち破られ、ハムル地方は東方の手に落ちてしまった

遊牧民の戦士
中原各地には、多くの遊牧民の部族が住んでいる。彼らは勇敢な戦士でもあり戦いぶりには定評がある。馬上で戦いやすいように曲剣と弓矢を携えることが多い



ダマスタの騎士
ダマスタには二種類の騎士がいる。清貧を堅持する騎士と、世襲や賄賂、虚栄にまみれた騎士である。現在ダマスタ王朝は、本来の高貴さを維持できるかどうかの瀬戸際にある



月(名称)	月の長さ	曜日(名称)	一日の時間
1月(アーモ)	29日	土(ツ)	午前0時~零の刻
2月(イシュー)	30日	水(シュ)	2時~一の刻
3月(ボウ)	32日	日(リイ)	4時~二の刻
4月(ピシュム)	31日	木(キン)	6時~三の刻
5月(ガルワ)	31日	火(ムウ)	8時~四の刻
6月(カナル)	32日	水(フォ)	10時~五の刻
7月(シアラ)	31日	木(ユイ)	午後0時~六の刻
8月(ラマン)	30日	土(フェ)	2時~七の刻
9月(イム)	31日		4時~八の刻
10月(エン)	32日		6時~九の刻
11月(タグリー)	29日		8時~十の刻
12月(コーマ)	30日		10時~十一の刻
12カ月	368日	8日(46週)	24時間(12刻)

備考/中原の暦は太陽暦(ラ・スウ)である。物語の始まった年は中原暦1537年。東方暦において2462年にあたる。

な知識の発見を求める西方工況会と、聖刻の奇跡を探求する東部にも追いやられたカン王朝も内乱によってシンへと王朝が移行し、中原はほぼ現在の体制に近い形となった。

十四世紀末、中原は新たな脅威に晒された。東方南部連合(アンシャン)の中原侵攻、いわゆる(第一次東方戦争)の勃発だ。東方軍の士気は高く、補給も充分だった。防波堤となるべきシン軍は瞬く間に打ち破られ、一時はシン国王が王都を捨てダマスタとの国境近くまで退いた。東からの脅威に、ホータン、ダマスタの両国は共にシンに派兵。また参戦しなかった他の諸国も、少なからぬ援助物資と義勇兵を送っている。危機に際して一枚岩となった中原は強く、破竹の勢いで進撃した東方軍も足が鈍り、一四〇一年には侵攻を断念して軍を西アグ河以東に退けている。

十五世紀中頃になると、ウル族の率いる遊牧民によってチェンが滅ぼされ、代わって騎馬民族国家ウルオゴナが建国された。十六世紀に入り、ウルオゴナはダマスタ領に攻め込むが、補給の失敗から砂漠越えて多くの人員を失い、オズノ山脈の手前でダマスタ軍に撃退された。この戦いで教訓を得たウルオゴナは、次の遠征ではまず砂漠に点在するオアシスを経由する補給路を確保した。だが、五万もの軍勢が向かった先は、ダマスタではなくホータンだった。まったく侵攻を予期していな

かったホータンはひとたまりもなく滅びた。

【中原の国家】

中原には現在八つの国家が群雄割拠している。広大な中原の土地柄、一国あたりの領土は東方や西方のそれに比べてとてもなく広いが、一応領土とされているだけで、実際には目の行き届いていない部分もかなりある。

中原における交易路のほぼ中央に位置するダマスタは、西方勢力の放逐を企てるシン王朝の後押しによってラウマーナ帝国から独立した。基本的な文化様式はラウマーナを受け継いでいるため、根本には西方文化が見え隠れするが、国内に旧来の豪

中原東部地図



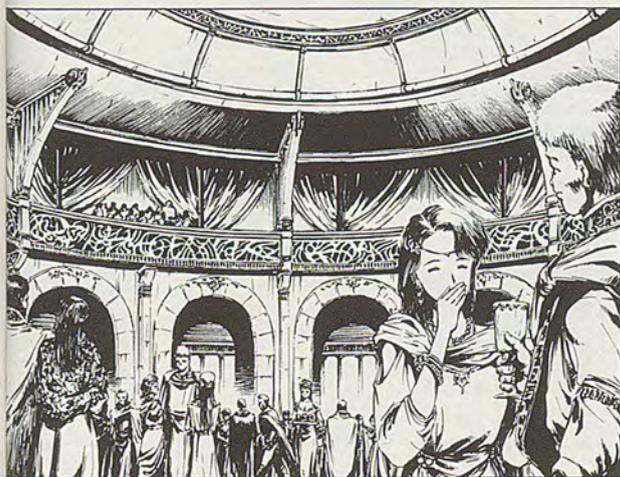
反乱によってチェン王朝を



貴婦人
政治に直接関わることは少ないが、彼女たちの発言はなまじな騎士などよりも重みがあることが多い



ミナル商人
西方に祖を持つミナル人は、中原において強欲な商人の代名詞として語られる。彼らにかかれれば商品にならぬものはないという



ダバヴァ王宮
ダマスタの首都ダバヴァで見られるのは華やかな宮廷政治であり、多くの貴婦人が出入りし、軍議などにおいても形式や手順の方が優先される傾向がある

族が多数残っているため、国家全体の傾向としては西方と一線を画している。

ホータンは帝国の解体後、ラウマーナから移行されて建てられた王朝である。帝国の正統な流れを汲む王朝であるため、帝国から独立した七カ国の中では中心的な存在であったが、十六年前、ウルオゴナによって攻め滅ぼされ、生き残った民も中原に散っていった。しかし近年、帰還した王女を立てて民が決起し再興を果たした。

キタンは地母神カリーマを崇める宗教国家である。中原では珍しい女帝を王に戴く国家で、女子の家督相続を認めている。かつては隣国ダマスタと戦争状態にあったが一九九〇年に終結している。

五十余りの豪族による連合制を敷いているのがレイケンである。一応、国の体裁は整えているものの、豪族同士の争いが絶えず、戦乱は絶えない。

ナリールは西方や東方に向けて輸出する干果、煎茶、香辛料などで財政を賄っている農業国家である。ただし中原国家の特徴である降水量の少なさで、他の農作物の収穫は乏しく、国力は低い。

ラウマーナ帝国から最も早く独立したパルティアは、西方の脅威を真っ先に受ける最西部に位置している。そのため東方聖刻教会から多量の操兵を購入して、侵攻に備えている。

的に戦力が上であったが、シ

〔中原東部域・シン国〕

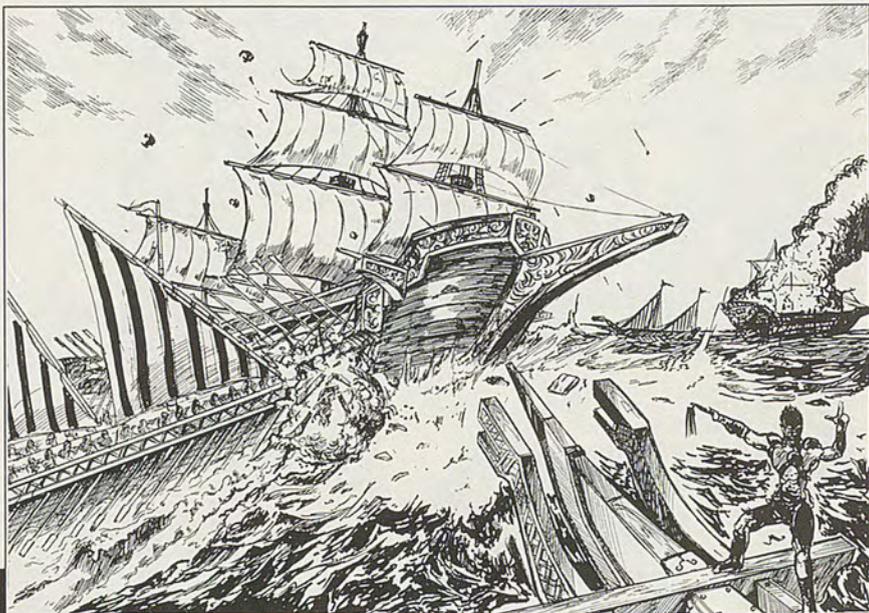
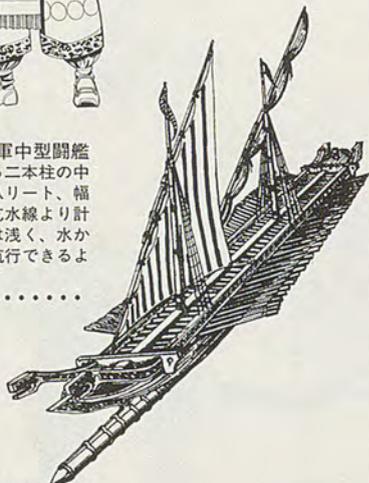
反乱によってチェン王朝を滅ぼして建国されたウルオゴナは、百二十もの部族からなる騎馬民族国家である。人口増加と、ゴナ砂漠の拡大によって領土の草原が不足してきたウルオゴナは他国への侵攻を開始。ホータンを滅ぼしたものの、ダマスタへの侵攻は五度にわたって失敗に終わっている。

シン国は中原の東の端に位置し、東方との接点に当たる国である。その境界線ともいへばアグ河を挟み、東方とはカン王朝の時代より何度となく戦を繰り返してきた。アグの二つの支流の間に広がる肥沃な三角洲地帯を巡ってである。むろん、多くの操兵を保有する東方軍のほうが圧倒

シンの王族
シンは、現在の中原の歴史とともに生まれ、
た古代帝国（ラ）を継承するもので、中原
において独特の伝統と様式を持っている



シン水軍中型開艦
シン水軍の主力となる二本柱の中型開艦。船体は長さ八リート、幅一リート半、高さは吃水線より計って半リート。船底は浅く、水かさの少ない水域でも航行できるようになっている



東アグの戦い
投石器や弩弓を使用する東方の大型艦に対し、シン水軍の中型開艦は艦首の衝角による体当たり攻撃で応戦した

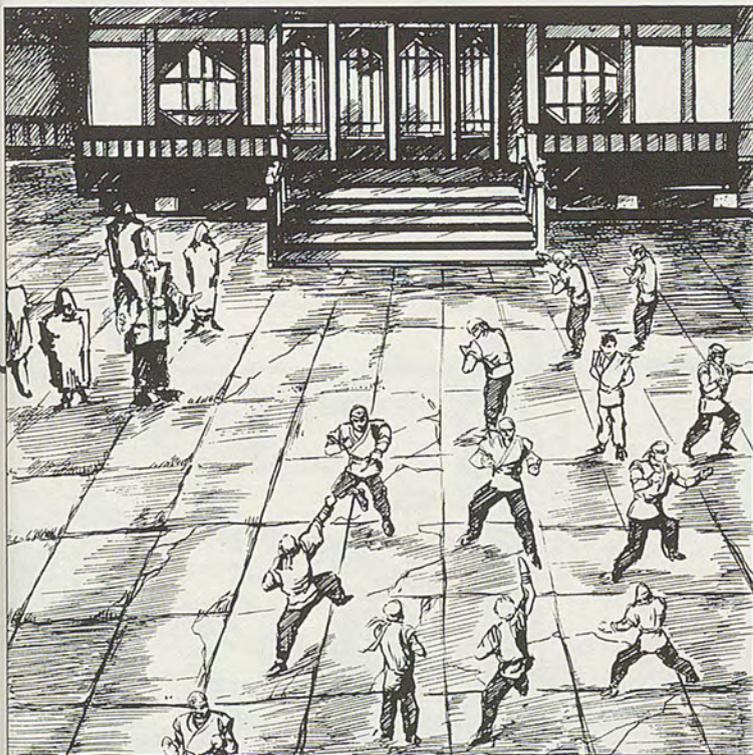
アグ河流域図



的に戦力が上であったが、シン軍は強力な水軍をもって対抗した。
最大規模の戦が中原暦一三九八年の（東方戦争）である。東方が中原進出を企図して、南部域連合軍（アンシャン）を組織し、これまでにない大軍をもってアグを渡河。一時シンは国土の半分を蹂躪されたが、ダマスタとホータンの参戦によって、一四〇一年、東方軍をアグの対岸に退けた。余り公にはなっていないが、この際、西方工呪会はただのような値段で、多数の操兵をシンに譲り渡しており、これが大きな勝因となった。

聖刻1092の世界

『中原の宗教』



ラマス僧の修行風景
境内で氣闘法や拳法の修行を行なうラマス僧。武術系の修行は、頑健な肉体を作りあげ何事にも負けぬ、ねばり強い精神を築くという意味を持っている

八角盤
八角とはラマス教において世界の仕組みを説く概念である。運命には外的な要因と内的な要因があり、究極的には二つの要素の組み合わせを積み重ねることだと考えられている。この板には、二因、四果、八応、八報の概念が図案で示されている



ラマス一般僧
.....



ラマスの僧正
.....



中原には交易路を通じて東西の文化が入り込んでいたこともあって、実に多様な宗教が存在している。場合によっては、国教と民間で奉じる神が違う場合もあり、対外的に国教を持つてはいても、実際には王族の祖先を祭っている国も存在し、東方の聖刻教を奉じるものもあれば、西方の八柱神を崇めるものもある。

〔ラマス教〕

中原で最も広く民間に浸透しているのは、ダマスタ郊外に総本山を持つ(ラマス教)である。ラマス教はラ・カン王朝の王族であった聖者カルタ・オム・ラマスを開祖とする宗教である。聖者ラマスは奉仕と自己研鑽を怠ることなく常に自らの心身の鍛錬を続け、ついには天の理を悟るに至りその功德によって、民衆を救済したといわれている。中原では現在の歴史が始まって以来戦乱が絶えず、民衆は常に貧窮していた。ラマス教はそのために生まれたといっても過言でない。度重なる戦乱のなか、ラマス僧は民衆への奉仕や侵略者の排除、部族間の調停などを行なう集団として社会的に認知されていったのである。

ラマスにおいて語られる教えは、神に依存して漫然と救済を待つことではなく、自らの努力

聖刻1092の世界

によってこそ本当の幸福を呼ぶことができるという考えに基づいており、神の言葉はその導きでしかないと語っている。そして人の努力が及ばないときは、ラマスの使徒である僧侶が持てる力を振り絞り救済に努め、僧の力も及ばないような時、ようやく神は人の努力を認め御手を差し伸べるというものである。

ラマス僧は神の教えの忠実なる実践者である。神に成り替わり、神聖なる言葉を広め、民衆を導く者たちである。また、ラマスの救済は信者であるなしといった区別はない。苦しみ悩める民の総てを分け隔てなく扱う。時によっては僧侶自らが武器を持ち、民の盾となつて理不尽な暴力や略奪と戦うこともある。

本質において、聖者ラマスの業績を継承する行為が民衆を救う基となる。

ダマスタなどで国教とされている《カルバラ教》も中原の交易路沿いの交易都市などで多く奉じられている宗派である。カルバラ教では、聖者ラマスなどはカルバラの主神である炎の神カルバラの従神とされているが、これはカルバラ教が中原の土着信仰を手当たり次第に統合したためともいわれている。

この他にも、キタンの国教・地母神カリーマヤ、《ラ》の

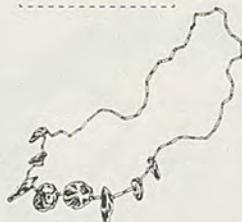
ラマスの法具

ラマス僧が、民人に請われて儀式的な行事を執り行なうときに使用する法具の数々。ラスを払う音叉と魔を写しだす鏡、そしてひとつひとつの玉が生命力を象徴する玉飾りである

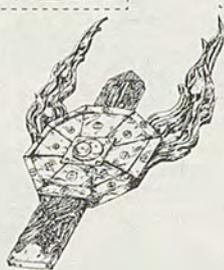


ラマスの礼服
修行僧が行事などに際して着用する礼服。儀礼用の腰布をあしらっている

ハツ玉飾り



八角盤音叉

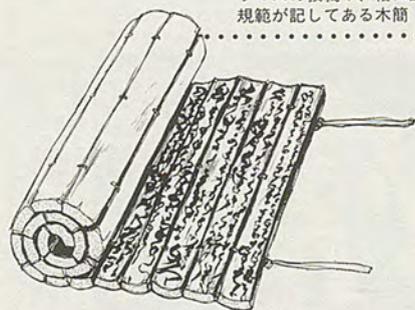


八角鑑（鏡）



教典
ラマスの教義や、僧に課せられる規範が記してある木簡

二巴環（冠）
修行初期の見習い僧が、心身の安定を図るために身につけることが多い



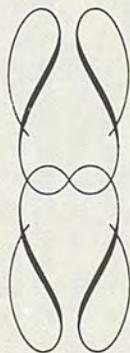
は、二因、四果、八応、八報の概念が図案で示されている

【気功術・気闘法】

時代より受け継がれた教えが、ラ・タンを経て、この地方の土着宗教と結びついて変質し、農耕民族的性格を帯びたシン国の《バハール教》などが中原では著名な宗派である。

気功術とは、《気》を制御し、肉体の潜在的な能力を顕在化させる術である。病気とは、体内の気脈（経絡）における気の流れの悪化によって起こる肉体諸器官の変調である。無論外見的要因もあるが、大半の病は気の不整脈を直すことで回復する。中原における気功術は《気》の概念が中心にあり、信仰的な側面と切り離すことはできない。ラマスの僧は民衆の救済に積極的に気功術を使用している。

気功術のうち、特に格闘術に用いられるものを気闘法という。その修行は《気》を高める内功の鍛練に始まる。一連の動作と特殊な呼吸で体内の気脈を整え、循環を良くする。精神の鍛練も修行の一環だが、見習僧などにはその意味も教えないため、ただの拳法修行にしか見えない。事実上《気》の仕組みそのものが気闘法の奥義である。



聖刻1092の世界

『東方』

聖なる刻印を崇める民が住み、神秘と魔道に包まれし地、東方。古の八聖者の教えのもと聖刻の秘術を駆使し、大地を揺るがす巨人騎士を生み出す聖刻教会。ここはアハーン最古の歴史を持つ神秘と驚異の大地である。

【東方とは】

アハーン大陸の東端に位置し、大山脈カーランカと魔物ひしめく大海とに囲まれた閉鎖的なこの大地を東方と呼ぶ。閉鎖的といっても他の地域とまったく交流がないわけではない。西方より延びた交易路は中原を経てこの東方にも届き、東方東部域の交易都市では立派に文化交流も行われて



東方全図



教都への巡礼
東方各地から教都ワースランへの巡礼を行なう聖刻教の信者たち。彼らは皆、教典に記された聖句を唱えながら一路教都を目指す。沿道にたたずむ操兵は、巡礼者警護のために配置されているものである



聖刻教の布教
教務団の布教師は、聖刻教の信仰が薄い地や未信仰の地を訪れ、聖刻の奇跡を民に説く布教活動を行っている

【東方動乱】

教会暦二四三三年六月一日、西部域のスラゼンの軍勢が、前触れもなく旧王朝時代より続く歴史ある国ヒゼキアの領内に侵攻し、王都ア・ゴーンを攻め落とした。東方全土を焦土と化した大動乱「東方動乱」の幕開けとなった戦である。

聖刻教会法王アショールは、当初から紛争当事国に争いをやめるよう訴えてきたが、領土拡大欲にとり憑かれた世俗

いる。また、聖刻の秘技を探求し続ける聖刻教会が製造する巨人騎士操兵は、東方だけにはとどまらず遠く中原の果てまでも届けられているのである。では、なにゆえ東方を閉鎖的と呼ぶのか。それはそこに住む民衆の思想のゆえである。東方の民は神秘的な力を畏れ敬う気質を多分に持っている。

君主はその声を無視した。現

原を主戦場としたこの戦は、

聖刻大全 聖刻1092の世界

君主はその声を無視した。現在と異なり、当時、教会は世俗君主を従えるだけの政治的指導力を有していなかった。理由に挙げられるが、それ以上に、教会は創設以来の政教分離の大原則を貫き、政治に對するあからさまな干渉を手控えてきたのだ。しかし、動乱が西部域から南部域や東部域に飛び火し、東方全土を巻き込む大動乱に発展するや、教会も不干渉の原則を曲げなければならなかった。

二四四〇年、教会は聖刻騎士団の投入に踏み切った。ラドウ・クランド団將に率いられた聖刻騎士団は、東部域の「ニームレの戦い」を皮切りに破竹の勢いで進撃し、東・南部域の反乱勢力をことごとく蹴散らしていった。そして二四四七年、最後まで教会の介入を拒み続ける西部域の大國ライリツと対決する。だが、無敵の「神の軍団」も、七年にもわたる戦の連続により多くの騎士を失い、ヘートルハルの戦い」の時点では、騎士の総数は最盛期の三分の二まで落ち込み、生き残りにも無傷の者はいなかった。ラドウはすでに教会に恭順の意を示した西部域の国々に援軍を要請するが、強大なライリツの軍勢を恐れ、諸国は中立の立場をとった。

ライリツ領のトールハル平

東方史概略

<p>..500年 ●〈ク〉が建国される。現在の東・南部全域を版図とする巨大な帝国だった。その支配は以後千四百年間にわたって続く</p> <p>紀元0年(教会暦)</p> <p>899年 ●南部域において、反帝国を旗印にした国家ハラ・カトが建国される</p> <p>927年 ●大帝国〈ク〉が解体。東・南部域は戦国時代に突入する</p> <p>979年 ●聖刻教会、北部域にワースラン法王国を建国。同時に北部域諸國に布教を開始する</p> <p>1088年 ●〈教都包圍戦〉。北部域のアスパサカとトゥエンデ、教都ワースランに攻め込むも敗退</p> <p>1118年 ●北部域のアスパサカとトゥエンデ、國ごと聖刻教に帰依し、國名をカルド・アル、カルド・エルと改める</p> <p>1123年 ●ハラ・カト、南部域を統一</p> <p>1332年 ●南部域の統一王朝であるハラ・カトが分裂する。世紀末までにエーギン、アーリア他十七カ國が建国される</p> <p>1349年 ●西部域にライリツ建国。十四世紀初頭より、〈ク〉の征服戦争を退けた西部域の旧王朝諸國が衰退し、新國家が続々と誕生</p> <p>2015年 ●聖刻教会、西方ラウマーナ帝國中の中原進出に呼応して、中原諸國に操兵の譲渡を開始する</p> <p>2281年 ●南部十七カ國による政治・軍事・経済の連合体〈アンシャン〉が結成される</p> <p>2313年 ●アンシャン、中原に進出。(第一次東方戦争)勃発</p> <p>2315年 ●〈西アグの戦い〉。有史以来最大の艦隊戦。</p>	<p>●アンシャン艦隊敗北</p> <p>2320年 ●アンシャン、分裂。(第一次東方戦争)終結</p> <p>2326年 ●南部域のアーリア、ツェラ・トゥとテオモを併合。南部最大の國家となる</p> <p>2433年 ●西部域のスラゼン、東方最後の旧王朝ヒゼキアを征服。(東方動乱)勃発</p> <p>2435年 ●南部域のエーギン、ハイケス(現西部域)とナモ(現南部域)に分裂</p> <p>●南部域のクーコン、西部域のシルスを征服</p> <p>●中原のシン、ハムル地方を奪取</p> <p>2438年 ●西部域のハグドーン、スラゼンを征服</p> <p>2439年 ●南部域のナモ、旧エーギンの属國オモスを併合</p> <p>2440年 ●聖刻教会、動乱鎮圧のため聖刻騎士団を投入</p> <p>●〈ニームレの戦い〉。東方動乱における聖刻騎士団の初の戦。以後〈トールハルの戦い〉までに大小合わせて五十以上の戦闘を繰り返す</p> <p>2447年 ●〈トールハルの戦い〉。東方動乱における聖刻騎士団の最後の戦。西部域のハグドーン軍を破るも、自軍に多数の戦死者を出す</p> <p>●聖刻教会法王アショッカ、〈東方動乱〉終結を宣言</p> <p>2448年 ●聖刻騎士団、「四軍十六小騎士団」体制に移行</p> <p>2451年 ●南部域ナモ國にて旧オモス残党による反乱〈パソルの乱〉が勃発。同年、聖刻騎士団の参戦により鎮圧</p> <p>2452年 ●南部域六カ國連合軍〈ラ・カシス〉結成</p> <p>2454年 ●〈東アグの戦い〉</p>
---	---



..... 聖刻教典
聖刻の使徒としての戒律や教義、後世の予言などが記載されている教典。聖刻教の信徒ならば必ず所有しているものである

大聖華

聖刻騎士団団旗や各種記章、聖騎士、教会僧などの制服などに使用される正式な聖華。教会の神紋たる八枚の蓮の花びらは、教会の始祖である八聖者を表わしている



..... 聖騎士
聖騎士の守護と、布教を妨げる敵や障害を排除するために設けられた(聖刻騎士団)の構成員。僧侶ながら騎士の称号を持ち、その強さは天下無敵。東方では「神に仕える騎士」とも呼ばれている



原を主戦場としたこの戦は、序盤戦より物量においてはるかに勝り、地の利を持つライリツが押し上げた。聖刻騎士団は勇戦を続けるが、少しずつ戦力を削がれ、潰走寸前まで追い込まれた。そこに援軍が駆けつける。ハグドーンの豪族、グッテン・カムリ率いる義勇軍であった。戦の成り行きを窺っていた豪族、傭兵を口説き、参戦に踏み切らせたのだ(この功績によりカムリ家は明くる年に八聖家入りする)。

勢いを得た聖刻騎士団は、一気にライリツ軍を押し戻す。そしてジャン・ストラが駆る狩猟機パラシユ・パラハが、敵軍の本陣に突入して大将機の首を叩き落とすとライリツ軍は敗走した。ライリツの武帝ザシーニは教会への恭順を誓い、ここに一四年間にわたる大動乱は幕を閉じることになった。

土拡大欲にとり憑かれた世俗

【東方の国家】

東方は東西南北四つの地域に分かれており、それぞれの地域には風土、歴史、文化、習慣といった点で違いのある様々な国家が存在している。

【東部三カ国】

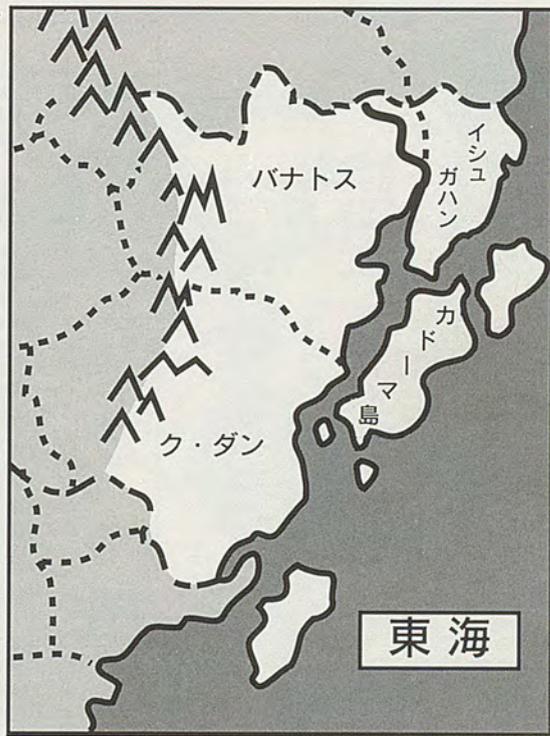
バナトスは東方最大の都ヴィンシャームを有する商業国家であり、十八世紀末の「法王継承戦争」の際、十五カ国を統合して成立した。バナトスの勝利は東海沿岸の五百余りの自治都市の支援あってこそといわれ、今日でも商人が優遇されている。

大陸の東端に位置するイシュー半島と、東海に浮かぶカドーマ島を国土としているのがイシユガハンである。イシューのカドーマ島征服は十世紀のことで、現在では半島側に副都ジャルガ、島側に主都ラジャンを置いている。進んだ造船術と航海術に支えられて、東方における海運業を独占、東海を航行する大型船のほとんどはイシユガハン船籍である。

ク・ダンは東方動乱終結後に生まれた、ククル、ダノ、ヤーパス、マズラ、ウイドウの五カ国による首長国連邦であり、各国首長による合議制をとっている。セマーズ山脈に多くの鉱山を抱え、ことに

東方東部三カ国

東部域は東方の中心といってもよい地である。かつて東方を掌握した大国のほとんどが、この地より生じている。気候は一年を通じて温暖であり、農作物に恵まれている。また交易路の終着地でもあり、商業と文化の面で栄えている



北方北部三カ国
北部域は凍てつく大地である。およそ一千五百年前に聖刻教会の教都ワースランができるまでは、歴史から置き去りにされた土地であった。しかし、ワースラン建立以降は、東方全土に勢力を伸ばした聖刻教会の信者たちによって、聖地として崇められている

鉄の生産量は東方一である。

【西部域七カ国】

ライリツは千年の歴史を持つ西の強国である。東方動乱においては、ル・ゾ、ジンバー、ハグドーンといった周辺国に攻め込み領土を広げた。だが、ここ数年国王が病の床に就き、世継争いが国政を二分するにいたる。

ハグドーンは動乱の際、ヒゼキアを滅ぼしたスラゼンを倒し、二国の領土を手に入れてライリツに次ぐ強国にのし上がった国である。

コクーコンは以前、南部域に属していた国である。動乱の際に西部域のシルス、マオカ、グリルフォの三国を併合し現在にいたる。

ベイケスは動乱において南北に分裂した大国エーギンの片割れである。かつての同胞である南部のナモとは動乱終結後も常に緊張関係にある。

ホルダークは領土の大半がセマーズ山脈にある山岳国である。この国は良質の聖刻石の産出地として知られるため、動乱以前より聖刻騎士団がこの地を警護している。

ジンバーはホルダークと同じくセマーズ山脈沿いの山岳国である。有望な聖刻石の鉱床は発見されていないが、代わりに多くの古代遺跡が発見

文化、習慣が異なる。

⑥ 聖刻大全 ⑥ 聖刻1092の世界

されている。
二大山脈に挟まれた国ル・ゾ。国土の三分の一が標高五〇〇リート以上の高地で、三分の一が湿地と居住条件は悪く、住民は南部の低地に集中している。

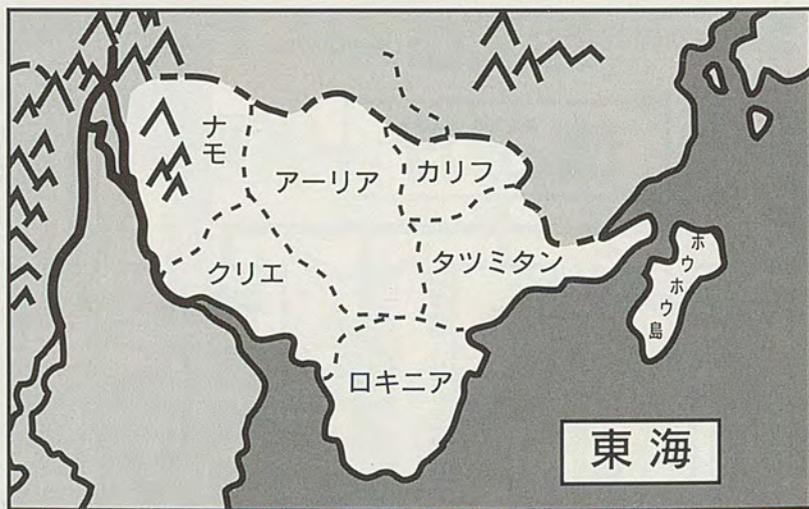
【南部域六カ国】

国力、軍事力共に南部六カ国最大最強のアーリア。エーギン分裂後の連合体で主導的な立場にある国である。動乱においてはツエラ・トウ、テオモを併合。また現在は西部域連合に属するコクーコンの本国領地を奪い、南部一の国土を領有するにいたる。

ナモは大国エーギンの分裂後の片割れである。西部域連合に移ったかつての同胞ベイケスとは常に緊張関係にある。カルフは交易路によって東部域と、南北に伸びる街道によって西部域と結ばれている交通の要衝国である。

クリエは東方の玄関口でもある国である。長年にわたりアグ河に挟まれた広大な三角州地帯ハムルを領有してきたが、動乱の際に中原のシンに奪われた。

ロキニアは東方最南端に位置する密林の国である。東方で最も気温が高く、降雨量が多い。沿岸部に点在する町と、国境線に近い内陸部の町では、

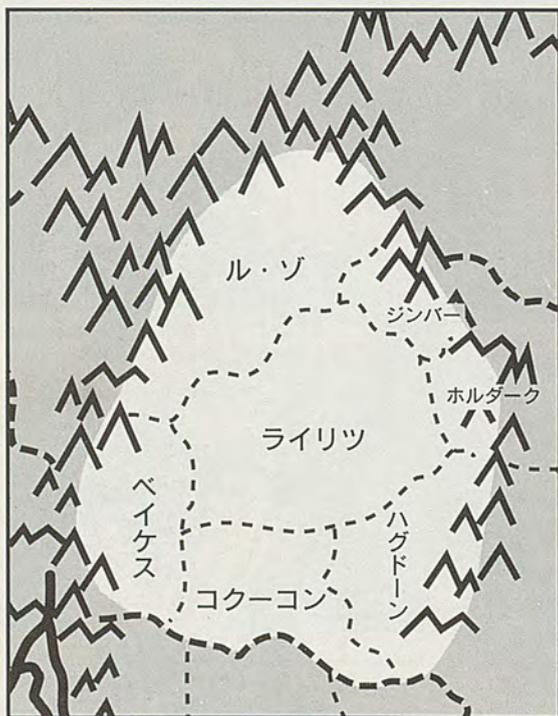


東方南部六カ国

南部域は戦いの神が統べる地である。豊かな大地を持ちながら古来より戦乱が絶えず、現在は聖刻教会の権威と力によって平和が保たれている

東方西部七カ国

西部域は若い土地である。中世期まで、紀元前より連なる王朝が数多く残る古の地であったが、永き時のなかで新興国に支配の座を明け渡していった

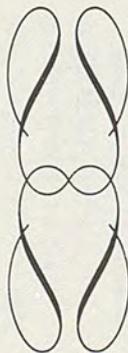


【北部域三カ国】

東方最小の国であるワースラン。正式名称は「ワースラン法王国」といい、十世紀に北方系移民によってドーラ平原に建国された。聖刻教の総本山である教都ワースランは、信仰の中心として東方中から年間十万人を超える信徒が巡礼に訪れる。

カルド・アルは旧国名を「アスバサカ」といい、十二世紀に国王が聖刻教会に帰依し、自らワースランを守護する国家を任じ、国名を変えた。東方で最も早く聖刻教を国教とした国である。

旧国名を「トウエンデ」というカルド・エルも、カルド・アル同様にワースランを守護する国家である。



全土に勢力を伸ばした聖刻教会の信者たちによって、聖地として崇められている

聖刻1092の世界

『東方の宗教』

【聖刻教会】

約二千五百年前、世界に混乱を招いた《八の聖刻》による戦いがあつた。このとき、激しい死闘の末に悪しき聖刻の一つを封印した八人の聖者が存在した。彼らはその後、聖刻の力を良き方向へと導き、苦しむ多くの民を救うべく一つの組織を作り上げた。これが聖刻教会の始まりといわれている。

《八聖者》は聖刻に眠りし神の意思を正しく見だし、民を至福の地に導くことを第一義とした。彼らは聖刻の加護を与えられた者の使命と、犯してはならない禁忌などを定義づけ、書物として後世に残

聖刻教会機構図



聖刻教会第百三十五代法王、ネーザ・ロスワルド・デ・ラ・オーム

● 聖印
● 主に聖刻騎士団員が所持する聖印。行動に支障がないように上腕部にはめ込む形となっている

● 聖者が身につけておられる銀製の首飾り、一般信徒が作られている



している。それが現在、聖刻教の教えの基本ともなっている《聖教典》である。

「聖刻の使徒はいかなる苦難が降りかかるうとも必ずや神の加護によって導かれる」との一文で始まるこの教典には、東方に現れ魔を封じた八人の聖者の奇跡や、聖刻の偉大な力、さらに使徒に課せられる戒め《八戒》について記載されている。

また、後世に対する予言も記述され、やがて訪れる新たな《聖刻の争い》に備えて、それに対処できる《力》の育成に努めよとも記載されている。この予言の部分は、後に中原で発生した白き操兵ニキ・ヴァシユーマールと黒き操兵ハイダル・アナンガの戦いを指しており、聖刻教会では白き操兵とその操手フェンの行動に、大きな関心を寄せている。

聖刻教会の修道士たちはこれらの教典に記された教義や戒めを心身に刻み込み、崇高なる使命のもと聖刻の教えを世に知らしめるために教務に励んでいる。

【聖刻教会の組織】

聖刻教会は、大きく分けて「法王庁」、「教務団」、「聖刻騎士団」、「練法師団」という

教務団上級僧の正装……

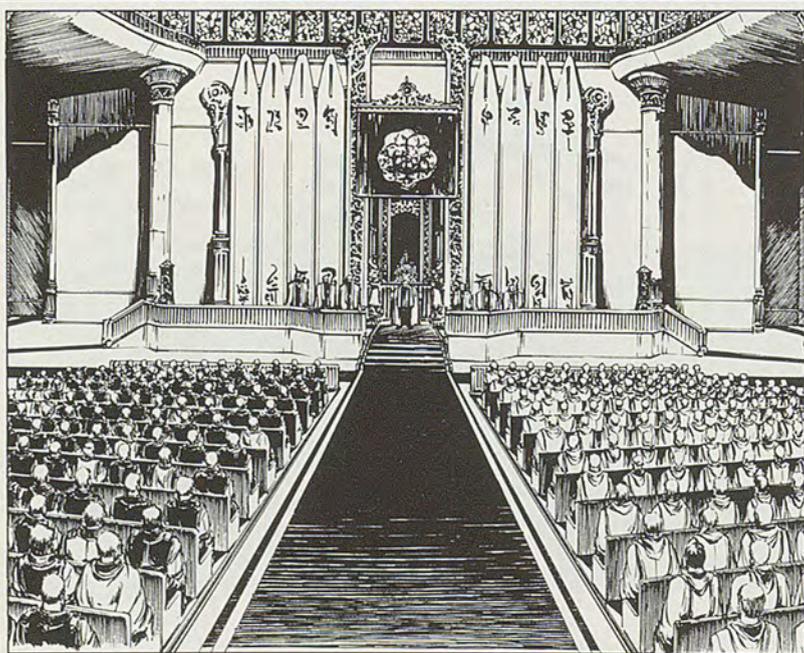
聖刻大全 聖刻1092の世界

四つの組織によって構成される。

法王庁は、教都ワースランのクラマツソ大聖堂に本拠が置かれており、教会の運営、教務、裁決の全権を掌握している最高機関である。教会の頂点たる法王のもと、各組織の長、《聖刻騎士団・団将》、《教務団・統轄総管区長》、《練法師団・大老》、そして教会内からえりすぐられた、法王の側近として仕える八人の高僧《八賢連》によって構成されている。

教務団は修道士によって構成された組織で、聖刻教の布教や信徒の救済などといった教会の一般教務を執り行なっており、修道士たちは、その格の高さによって八つの階級に分けられている。見習い僧である第一階級に始まり、一般僧の第二階級、布教師の資格を与えられる第三階級、派遣師の資格を与えられる第四階級、司祭と呼ばれる第五階級、教導師として各国に派遣される第六階級、管区長として一管区を任せられる第七階級、そして管区長を束ねるのが教務団の頂点たる第八階級の統轄総管区長である。

信徒もふくめ教会に属するすべての人間は（練法師を除く）、洗礼名を受け信仰の証として聖印である《聖華》を身



定期的にワースランで開かれる教会全体の総会議。聖刻騎士団や教務団の高位者によって、教務や各国の情勢についての討議が執り行なわれる

教務団上級僧の正装……



教務団一般僧の正装……



につけることを義務づけられている。

聖刻騎士団は教会と信徒の守護を目的に、結成された武闘集団であり、騎士団を構成する聖騎士たちもまた、修道士のように八つの階級が設けられている。従士である第一階級、平騎士と呼ばれる第二階級、小隊を率いる第三階級、中隊の指揮を取る第四階級、そして大隊を委ねられ《准将》と呼ばれる第五階級。この第五階級から《将》と呼ばれる上級職となり、第六階級になると小騎士団を率いる《師将》、第七階級では一方面軍をまとめる《軍将》となる。そして騎士団の全てを統轄する《団将》が、最高峰の第八階級である。

練法師団は他の組織とは違い、かなり独立した体制が敷かれている。八つの門派がそれぞれ独自に行動し、各々《門主》と呼ばれる長に率いられながら術と精神力の修行を所在不明の本拠地で行っている。聖刻騎士団、教務団、練法師団の三組織は、いずれも法王庁の命によって機能するが、通常はそれぞれ独自の活動を展開している。

【聖刻教会八聖家】

聖刻教会には、設立当時から絶え間ない信仰心とともに聖刻教の発展に多大なる貢献をしてきた八つの名家が存在する。これら八家は《八聖家》と呼ばれ、教会の法王庁、教務団、聖刻騎士団など教会組織の重職を担ってきた。

●第一聖 クランド家

八聖家の筆頭。北部域のクランド家は、武門の誉れ高き名家として知られ、聖刻騎士団の総長職である《団将》を数多く輩出してきている。先代当主ラドウも十余年にわたって団将を務めたが、前法王の死去とともに引退、家督を孫のラマールに譲り隠居生活に入った。

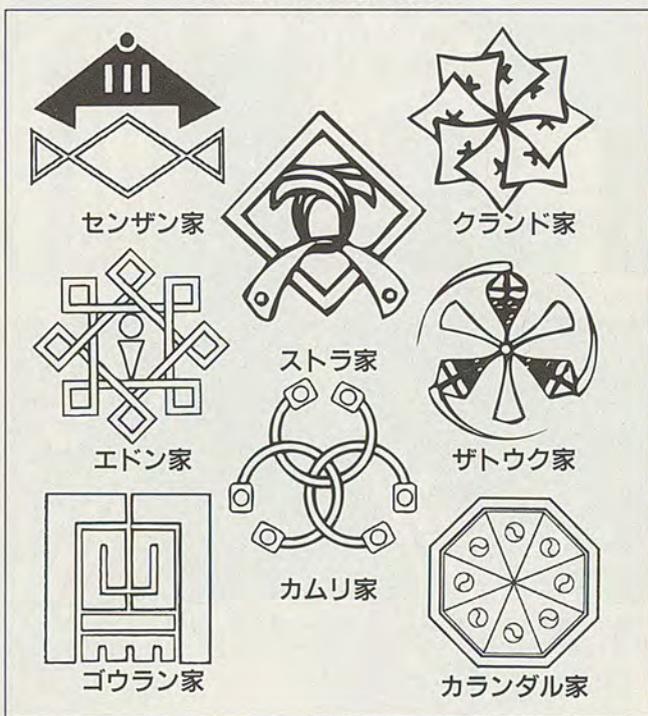
●第二聖 ザトウク家

北部域のザトウク家は、クランド家に次いで、団將を輩出してきた名家である。一門の將は勇猛さには欠けるが、策謀に長けた智將として、これまで幾度となく騎士団を勝利に導いてきた。

●第三聖 カラन्दル家

東部域のカラन्दル家は、僧侶を束ねる一族として代々教務団統括総管区長の要職を務めてきた。もともとは北部域の一族だが、千二百年前、東部域に移り住み《神聖同盟》樹立に尽力し、東部域の教化に多大なる功績を残す。

聖刻教会八聖家・家紋



聖刻教会八聖家表

第一聖	クランド家	当主／ラマール・クランド 役職／法王勅命軍総大将
第二聖	ザトウク家	当主／グラハ・ザトウク 役職／聖刻騎士団・団將
第三聖	カラन्दル家	当主／リクド・カラन्दル 役職／教務団統括総管区長
第四聖	ストラ家	当主／ジャン・ストラ 役職／現在幽閉の身
第五聖	カムリ家	当主／グッテン・カムリ 役職／西部方面軍・軍將
第六聖	センザン家	当主／ミシャギー・センザン 役職／法王庁財務長官
第七聖	エドン家	当主／ドワルド・ボル・エドン 役職／法王側近《八賢連》の長
第八聖	ゴウラン家	当主／ユジック・ゴウラン 役職／鍛冶匠合・総代

八聖家当主と法王ネーザ



●第四聖 ストラ家

南部域のストラ家は、忠誠心と義侠心に篤い一族として、歴代法王および団將に信頼された名門である。他家と異なり、ストラ家は、騎士と僧侶の両方に優れた人材を多数輩出している。

●第五聖 エドン家

北部域のエドン家は、「法王の知恵袋」と呼ばれ、智をもって教会を支えてきた名家である。東方各国に派遣されている《教導師》は、表向き教務団に所属するが、実際はエドン家に掌握され、各国王家の動向が日々当主のものにもたらされる。

●第六聖 カムリ家

西部域のカムリ家は、東方動乱終結後、八聖家入りした武門の一族である。最も新参の家であるが、保有兵力は東方でも有数の規模を誇り、西部方面軍筆頭の黒狼騎士団は、事実上カムリ家に占有されているといっても過言ではない。

●第七聖 センザン家

東部域のセンザン家は、東方最大の交易都市ヴィンシャムを仕切る商人の家系で、豊かな財力をもって教会を助け《法王継承戦争》終結後、八聖家に名を列ねた。

●第八聖 ゴウラン家

教会の操兵製造に、古より携わってきた鍛冶の一族。操兵鍛冶匠合を率い、操兵製造

の秘儀は、一族が握っている。独自の諜報組織を有し、西方工況会の動向を探るため、中

聖刻教会練法師



契を正確に結ぶ。そして、それと同時に定められた呪句を

⑥ 聖刻大全 ⑥ 聖刻1092の世界

の秘儀は、一族が握っている。独自の諜報組織を有し、西方工呪会の動向を探るため、中原や西方にまで間者を派遣している。当主が操兵鍛冶の匠合長を務めるが、教会の組織の中で完全世襲制はここだけである。

【練法と練法師】

古来より、アハーンに住む民はみな「力」を求めてきた。他の民を殺す道具しかり、その延長線上にある「操兵」しかりである。では「力」とは何か……二つの天体と六つの大地」と聖刻教会の《八聖者》は答えている。「二天」とは、天空を司る太陽と月を表し、「六大」は大地を司る火、水、木、金、土、風を表している。これら「二天六大」の要素それぞれから直接的に「力」を取り出す技、それが《練法》である。

「練法」とは、聖刻石の力を用い印契と呪句によって、二天六大から力を引き出す技にほかならない」と練法を駆使する輩は答える。《聖刻石》とは、謎の力が秘められた「寶石」のことであり、《印契》とは、手指を用いて作る「形」、《呪句》とは言葉が発して唱える「句」を表わしている。

練法を発動させるためには、まず発動させる術のイメージを術者が頭に思い浮かべる。次に、術ごとに定められた印

第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七
第八

聖刻教会練法師



八聖家当主と法王ネーザ



練法には八つの「門派」によって様々な種類が存在し、なかには強力な破壊力を生むものも存在する

練法陣の中央に座し、発動させる「術」のイメージを思い浮かべる練法師。これに印契と詠唱を加えることによって「結印」が完成する



契を正確に結ぶ。そして、それと同時に定められた呪句を詠唱する（この動作を《結印》という）。このときに聖刻石の力の一部を使うのであるが、より強力な術を行使する場合は、その術に応じた触媒を用いて力を導引しやすくすることもある。

こうして導き出された力を変化させ、当初に抱いていたイメージ通りに術を発動させるのが練法の術なのである。

《練法師》とは、《練法》を駆使する輩である。というのが一般的な見解ではあるが、これは、決して全容を表しているわけではない。練法師にとって、練法の行使は日常的な作業の一つでしかなく、それ以上に重要な職務を、練法師たちは抱えている。

練法師の第一の職務は、練法を守ることである。彼らがなぜに練法を守るのかは、いまだ明らかにはされていないが、彼らは世間から己の存在を隠し、また正しい資質を持った後継者を常に探し求め、育て続けている。

練法師の第二の職務は、練法の研究である。遺跡や文献を調査して古代の練法を発見したり、他の術法を研究し練法の新しい可能性なども常に探り続けている。

結論として練法師とは、練法を通してこの世界の謎に迫ろうと、その秘術の総てを模索、研究している者たちなのである。

聖刻1092の世界

『聖刻騎士団』

東方聖刻教会には、信徒の安全や教会の信仰を護るために結成された武闘集団が存在する。信徒の中からえりすぐられた、信仰が篤くかつ腕の立つ騎士によって構成され、教会と法王に対する絶対的な忠誠と、厳しい戒律によって統制がとられている。この組織の名を、聖刻騎士団という。聖刻騎士団の団員は全て僧籍を持っており、神に仕える騎士という意味で聖騎士と呼ばれる。

聖刻騎士団は、東方の四地域をそれぞれの管轄区とする。四方面軍に分けられており、各々部隊を象徴する東方の四聖獣（東の鳳、西の狼、南の龍、北の虎）を軍の冠に戴

東部四鳳騎士団章



西部四狼騎士団章



南部四龍騎士団章



北部四虎騎士団章



● アッシャー・ラグ

- 南部四龍騎士団が制式機としている機体。〈ラグ種〉と呼ばれる南部伝統機の流れを汲む新型機で、兜の二本角は、軍団が象徴とする東方四聖獣の〈龍〉の角を模している



【聖刻騎士団の編成】

北方面軍（四虎騎士団）
四軍の中では最も位が高く、教都ワースランを含む東部北地域を管轄としている。軍旗の意匠は、聖華を背に睨み合うように向かい合った白と黒の虎で、制式狩猟機は〈ダイカー・ラーフ〉。

● 白虎騎士団
《虎》の筆頭にして十六小騎士団中第一位。
法王と教都ワースランの警護という聖刻騎士団において最も重要な役目を担い、いかなる戦が起きようと、教都の外には決して出ることはない。団員は第四階梯以上の聖騎士

ている。さらに、各方面軍は赤、青、白、黒といった四色の小騎士団に分けられ、聖刻騎士団全体で考えれば、合計十六の小騎士団によって構成されていることになる。

聖刻騎士団は東方最強の軍隊ではあるが、教会法王庁の命が下らなければ動くことはない。その行動は教会と信徒の守護に限られ、基本姿勢としては戦争や内乱などには関与しない。だが、それによって信徒の生命や財産が脅かされる場合は率先して参戦し、聖刻にあだなす神敵として相手を殲滅する。

聖刻大全 聖刻1092の世界

のみ(従士なし)で構成され、団長職は北方方面軍の軍將が兼務する。先々代の団將ラウド・クランドの例をみるまでもなく、歴代の団將は白虎の出身者が大半を占める。団旗は黒縞の白い虎。

●黒虎騎士団

《虎》の次席にして騎士団全体では第六位。ワースラン法王国が管轄。ただし教都の外に限る。兵力は三個大隊で、《虎》の中で最も大きい。団旗は漆黒の虎。

●赤虎騎士団

《虎》の三席にして第十位。管轄はカルド・アル。兵力は二個大隊。団旗は赤い虎。

●青虎騎士団

《虎》の末席にして第十二位。管轄はカルド・エル。兵力は二個大隊。団旗は青き虎。

南方方面軍(四龍騎士団)

東方南部域を管轄とする。南部は気性の荒い人種が多い土地柄で、昔から内外の紛争が絶えない。当然、抑える側はそれにまさる勇猛さを要求され、結果として四軍の中で最強の軍団となった。軍旗の意匠は、聖華を背にして剣を啜えた二匹の龍。制式狩猟機は重装甲の《アッシュャー・ラグ》。



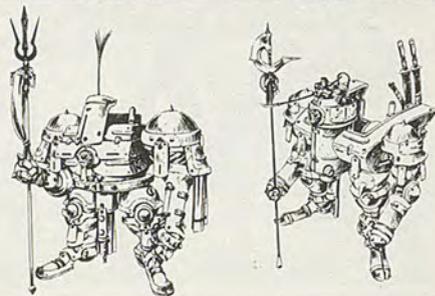
「神の軍隊」ともいわれる聖刻騎士団は、東方動乱の折まさに鬼神のごとき強さを発揮し、東方各地の内乱を平定していった

- パイダー・ラーフ
- 北部の四虎騎士団制式狩猟機(ラーフ種)
- において名機と謳われたダイカー・ラーフの後継機。騎士団制式機四種の中で機体が最も大きい



ナバーラ、ヴァクレイ……………

聖刻騎士団の使用する従兵機。遠征などの際に宿営用の荷物や、予備の武装などを運搬するナバーラ(右)と純粹に戦闘を目的として作られたヴァクレイ(左)



●青龍騎士団

《龍》の筆頭にして第五位。管轄はクリエとナモの二国。兵力は三個大隊。団旗は翼を持った青い龍。

●赤龍騎士団

《龍》の次席であるが、十六小騎士団全体では、白虎に次ぐ第二位。《東方動乱》以前からアリアを管轄としている。兵力は三個大隊。団旗は赤い龍。

●黒龍騎士団

《龍》の三席にして第九位。管轄はカルフとタツミタンの二国。兵力は二個大隊。団旗は黒い双頭の龍。

●白龍騎士団

《龍》の末席にして第十三位。管轄はロキニア。兵力は二個大隊。団旗は白い龍。

東方方面軍(四鳳騎士団)

商業が盛んで、文化的にも優れた東方東部域を管轄する。兵員数は多くはないが、もともと装備が充実している。団旗の意匠は聖華を背に羽ばたく八本の尾羽を持つ鳳。制式狩猟機は《シャトル・ティン》。

●赤鳳騎士団

《鳳》の筆頭にして第三位。十六小騎士団の中でも、最も新しく最も充実した装備を有する。管轄はバナトス。兵力

は三個大隊。団旗は尾羽の一本が赤い鳳。

●青鳳騎士団

《鳳》の次席であるが、十六小騎士団中では最下位の第十六位。実体が明らかにされていない謎の部隊である。管轄は東方沿岸の島、カドーマ。団旗は尾羽の一本が青い鳳。

●白鳳騎士団

《鳳》の三席にして第八位。管轄はイシユガハン。兵力は二個大隊。団旗は尾羽の一本が白い鳳。

●黒鳳騎士団

《鳳》の末席にして第十四位。管轄はク・ダン。軍事上の要衝とされる土地であり、四個大隊を置く。団旗は尾羽の一本が黒い鳳。

西部方面軍（四狼騎士団）

東方西部域を管轄とする。

この地域は未だ《動乱》の混乱を引きずり、教会の勧告にもかかわらず、ライリツ、ハグドーン、コクーコンの三國は競うように軍備の拡充に励んでいる。聖刻騎士団も警戒を強め、数年前より兵力の増強を図るが、地元からの志願者が少なく、他の三軍から騎士を回してもらっている。当初は混成部隊だったが、騎士間の折り合いが悪く、出身ごとに小騎士団を再編成した。



シャトル・ティン

東部四鳳騎士団が制式機とする機体。重なりとした長い脚、《鳳》を模した兜や鎧の垂れが特徴である《ティン種》の最新機である



操兵組手「八闘力」

八闘力は操兵による無手の格闘術である。戦場では往々にして武器を失う場合もあるため、聖刻騎士団でも教練の一種として取り入れている

●聖騎士団・階級

団将（総騎士団長／ 第八階梯）	准将（大隊長／ 第五階梯）	平騎士
軍将（四方面軍団長／ 第七階梯）	中隊長（第四階梯）	
師将（小騎士団長／ 第六階梯）	小隊長（第三階梯）	
	一般騎士（第二階梯）	
	従士（第一階梯）	



ランバー・ウォルン………
聖刻騎士団制式機四種の中で最も小型である《ウォルン種》の機体。西部四狼騎士団の制式機で、機体形状は東方四聖獣の《狼》を彷彿させる

そのため騎士団間の競争心、敵愾心が強くなり、共同作戦ではしばしば衝突することも。ル・ゾ、ジンバーには聖刻騎士団は駐留していない。団旗は聖華を背に獲物をくわえた狼。制式狩獵機は《ランバー・ウォルン》。

●黒狼騎士団

《狼》の筆頭にして第四位。地元《狼》出身者一門だけで編制されている。管轄はハグドーン国。兵力は最大規模の四個大隊。

●白狼騎士団

《狼》の次席にして第十一位。《虎》出身者を主とする。管轄はライリツ。兵力は三個大隊。制式狩獵機は北部の《ラーフ》種。

●青狼騎士団

《狼》の三席にして第七位。《龍》出身者を主とする。管轄はコクーコン。兵力は二個大隊。制式狩獵機は南部の《ラグ》種。

●赤狼騎士団

《狼》の末席にして第十五位。《鳳》出身者を主とする。管轄はホルダーク。兵力は二個大隊。制式狩獵機は東部の《ティン》種。

部域は政治的に安定し、戦の

◎ 聖刻大全 ◎ 聖刻1092の世界

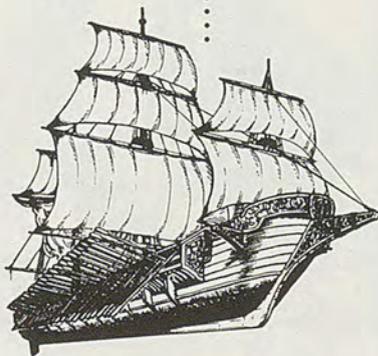
【南部連合軍】

東方暦二四五二年、東方南部域六カ国で新法王ネーザの呼びかけにより、南部域六カ国の首長会議が開かれた。これは動乱によって荒廃した国土を再建するために、各国が政治及び経済面で互いに協力する体制を築こうという主旨のもとに開かれた会議であった。会議は平和と豊穡の象徴である「聖樹」と呼称された。第一回会議では、南部域の国家間における相互不可侵条約の締結、新たに《四龍騎士団》として生まれ変わった聖刻騎士団南部方面軍を、国家の枠を越えた治安軍として受け入れる、動乱時に閉鎖されていた交易路を再開するなど決議された。特に交易路の再開は、東部商人の強い働きかけによるもので、南部域の当事国の頭を飛び越えて、ハムルを占領したシン国と事前交渉までもが行なわれていたという。もつとも、中原と東方の外交の歴史ではそれはすでに慣習化され、南部域の首長たちも事前交渉それぞれ自体に抵抗は示さなかったと伝えられている。

動乱終結より六年、東・南

東南部連合軍大型闘艦

アグ河において、シン軍と戦った東方軍の主力となった三本柱の大型闘艦。長さ十リート、幅二リート、高さは上甲板まで二リートという大きな船体を持っている

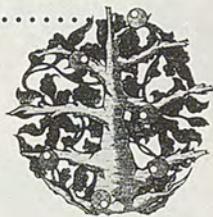


グーリ・シャルバーン……
東南部連合軍の秘密兵器。練法による空間転移能力をそなえる疑似呪操兵で、かつて中原のキタン国に出現したアグー・シャルバーンの改良型である

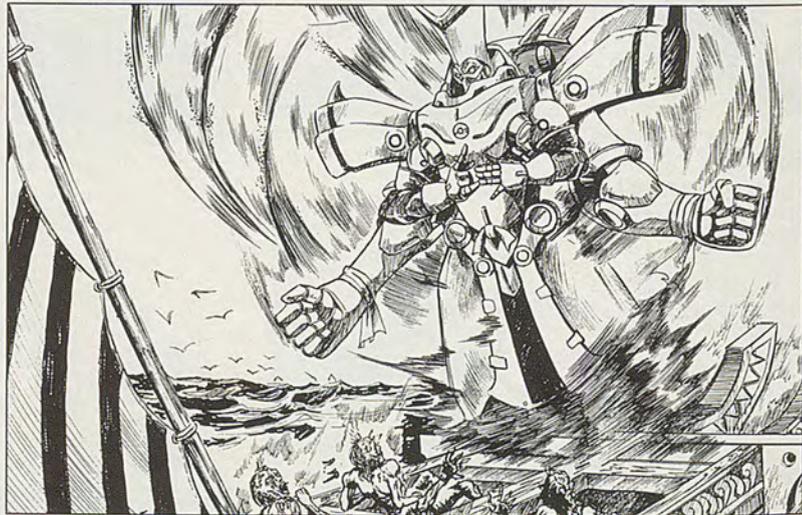


《ラ・カシス》連合章

次なる中原進出のために、東方の先鋒となるべく結成された南部域国家の連合体《ラ・カシス》の記章



《東アグの戦い》において、東方軍が投入した秘密兵器グーリ・シャルバーンは、転移能力を備えた疑似呪操兵であった。転移の際に付近の人間の生命力を吸収するこの操兵は、戦場において敵味方問わず屍の山を築き「死神」と恐れられた



南部域は政治的に安定し、戦の兆しはまったくない状態を迎えていた。経済的にも活発な商取引が行なわれ、国同士の物流も盛んである。もはや復興の時代は終わりを告げて、新たな発展の段階に移っている。だからこそ「外」に目を向ける余裕が生まれ、百年前には失敗に終わったハムル奪回という大規模な出兵が再び計画された。

首長会議の名称をそのまま冠に戴いた南部域連合軍《ラ・カシス》は二四五四年に侵攻を開始、東アグにおいてシン水軍と激突した。両軍双方多大なる被害を出し一時は膠着状態に陥ったこの戦いも、聖刻教会が投入した秘密兵器によって形勢は一気に侵攻軍に傾いていった。

とに小騎士団を再編成した。

は東方四聖獣の《狼》を彷彿させる